熊本県文化財調査報告　第１９０集

竈門寺原遺跡

―玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財調査―

２０００年3月

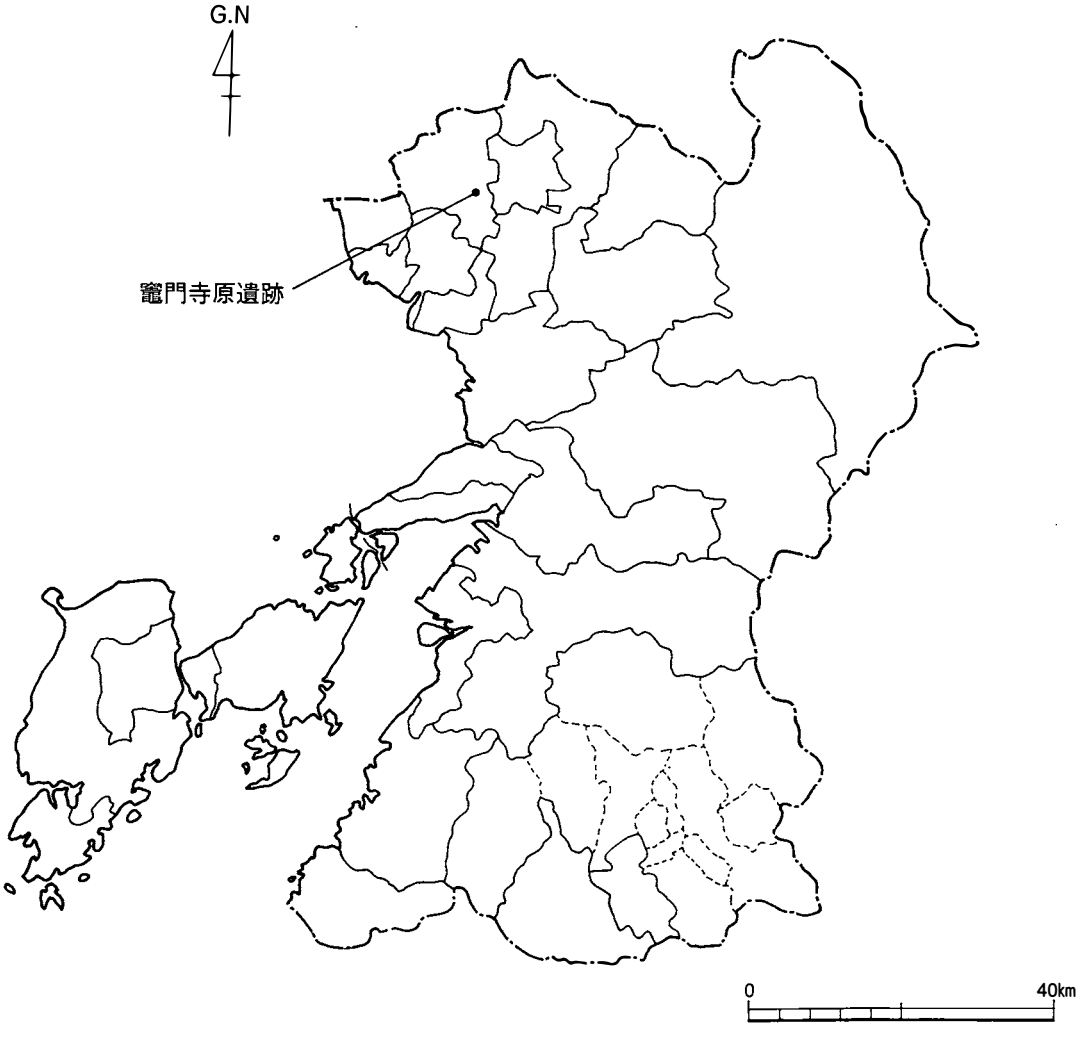
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第１９０集

かまど　てらばる

竈門寺原遺跡

―玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財調査―



２０００年3月

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県は、阿蘇山、天草をはじめ豊かな自然が数多く残されており、雄大な景観がみられるほか、歴史的にも数多くの文化遺産が残されています。竈門寺原遺跡が所在する菊池川流域にも、装飾古墳や大和朝廷が築城した鞠智城跡など数多くの遺跡が残されています。これらを守り、後世に残していくためには、県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力をいただかなければなりません。

本書は、熊本県土木部による玉名立花線緊急地方道整備事業に先行して行った竈門寺原遺跡の発掘調査報告書です。この竈門寺原遺跡は平成6年度に調査を行い、甕棺墓群、円墳等が確認されており、今回の調査の結果、古代末から中世初頭の掘立柱建物や中世の道路跡が確認され、多彩な様相を示す遺跡であることがわかりました。

この報告書が、菊池川流域の歴史を語るうえで重要な資料となり、皆様方の文化財に対する御理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御協力をいただきました地元の方々並びに関係諸機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成12年3月31日

熊本県教育長　佐々木　正　典

例　　言

1　本書は熊本県玉名郡菊水町大字竈門字寺原に所在する竈門寺原遺跡の調査報告書である。

2　調査は玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う事前調査として、熊本県土木部道路建設課の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施した。調査期間は平成10年5月11日から平成10年6月19日まで行い、報告書作成は平成11年度に行った。

3　本書に使用した「調査区位置図」は熊本県文化財調査報告書第149集「竈門寺原遺跡」を基に、「周辺遺跡地図」は熊本県遺跡地図を基に作成した。

4　現地調査に関する実測及び写真撮影並びに遺物の実測・撮影は主に調査員で行った。ただし、4級基準点測量のみ「有限会社　古家測量設計」に委託した。

5　遺物の実測は矢野裕介が行い、遺構・遺物の製図（トレース）及び拓本は曽我敬子、金光里美、川上寧子、徳永澄子が行った。

6　本書の執筆は矢野が行った。

7　本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、矢野が担当した。

凡　　例

1　現地での図面の縮尺は、遺構配置図は50分の1、土層断面図は20分の1、遺構の平・断面図は20分の1、土坑は10分の1である。ただし、第10図の遺構平面図は50分の1の図面を採用した。

2　遺構実測図及び遺構配置図の方位はすべて国土座標における座標北（G．N）を指す。

3　掲載遺物の番号は通し番号である。なお、縮尺は、遺物すべてを実寸トレース、2分の1縮尺とした。

本文目次

第１章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯及び調査組織・・・

挿図目次

第１図　調査区位置図・・・

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯及び調査組織

１　調査に至る経緯

玉名郡菊水町大字竈門字寺原において、玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う歩道付設のための道路拡幅工事が玉名土木事務所により行われることとなった。この周辺は、平成６年度の農業基盤整備事業に伴う県文化課の発掘調査により、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の土坑６基、弥生時代の住居址１基と甕棺墓群、古墳時代の円墳３基が見つかった地域であった。このように以前から遺跡として認知されている地域であったため、県文化課のほうで遺跡の範囲を確認する調査を行ったところ、溝状遺構が３箇所において確認された。

確認調査の結果、700㎡が本調査の対象となり、平成10年度に県文化課が本調査を行った。

２　調査組織

⑴　現地調査

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　豊田貞二（文化課課長）
　　川上康治（文化課課長補佐）
調査総括　　島津義昭（文化課課長補佐）
調査担当　　矢野裕介（学芸員）
　　安達武敏（嘱託）
　　隈部香織（嘱託）
調査協力　　益永浩二（菊水町教育委員会）
　　中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）

⑵　整理・報告書作成

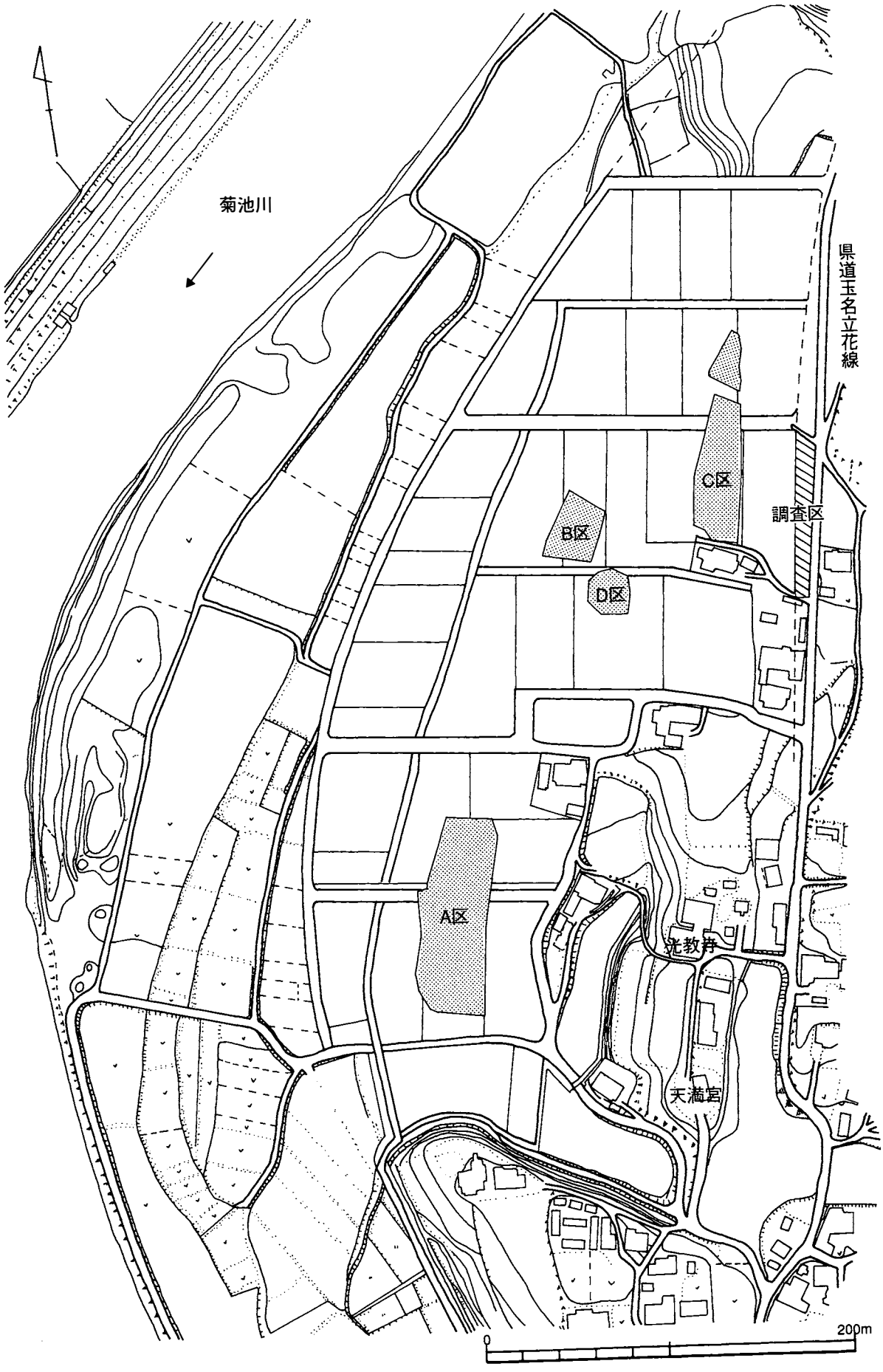
整理主体　　熊本県教育委員会
整理責任者　豊田貞二（文化課課長）
　　川上康治（文化課課長補佐）
　　島津義昭（文化課課長補佐）
整理総括　　江本　直（主幹）
整理担当　　矢野裕介（学芸員）

第２節　調査の方法と経過

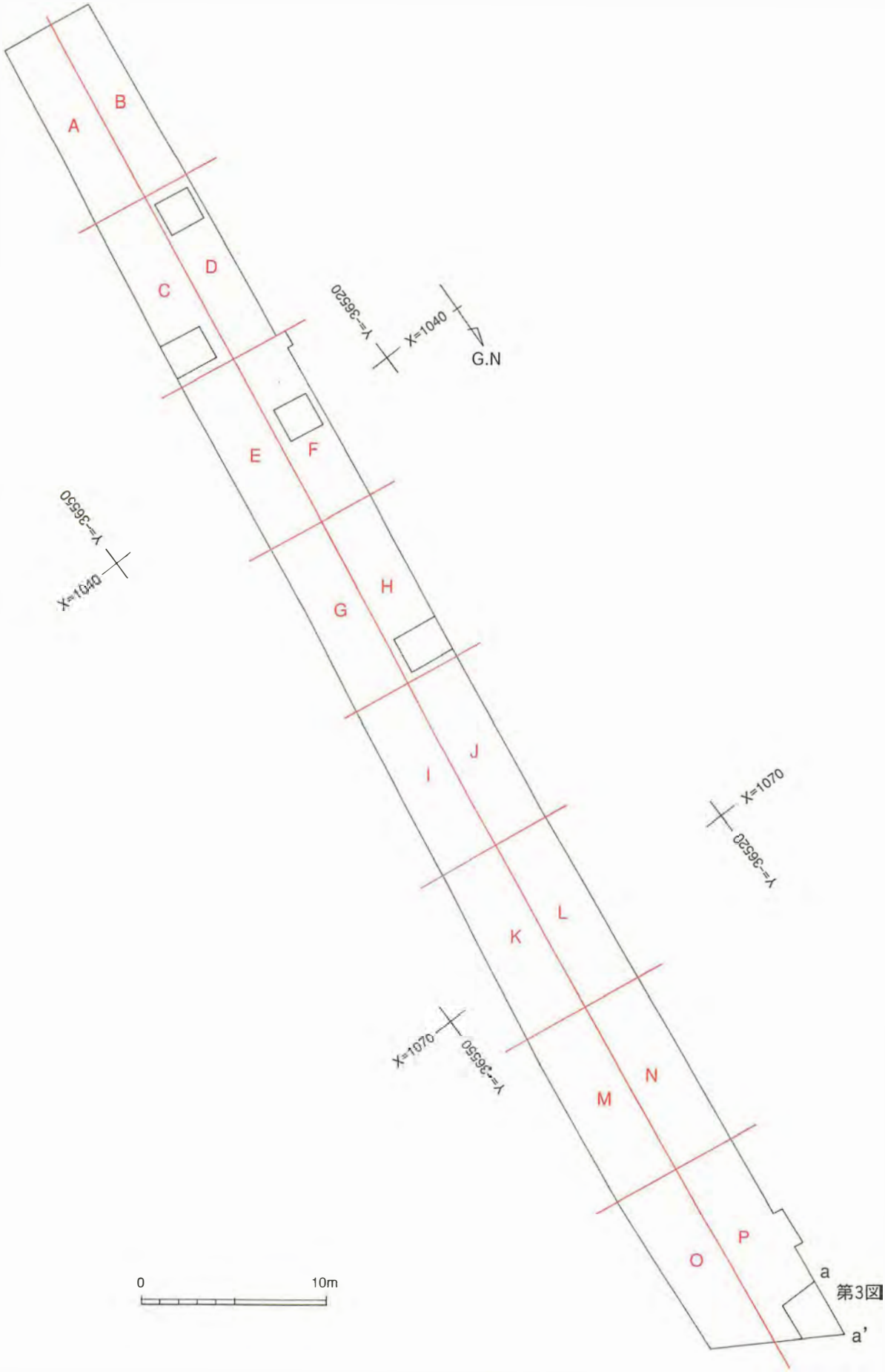
１　調査の方法

調査地は調査以前は畑地で、地表面から30～50㎝程までは耕作土であったため、その表土を重機により除去した。その他、遺構の検出及び掘削は人力で行った。

表土剥ぎの結果、調査地北側部分に縄文時代の包含層が僅かに残存していたが、ほとんどの箇所において削平が認められたため、遺構検出主体の調査をせざるを得なかった。遺構の検出は表土直



第１図　調査区位置図


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
a
a'
第3図
X=1040
Y=-36520
G.N
X=1040
Y=-36550
X=1070
Y=-36520
X=1070
Y=-36550
0
10m

第２図　グリッド設定図

下の面を検出面とし、南側から順々に行い、検出した遺構から掘削を行った。

調査の際の測量杭の設置は、全長82ｍ、幅5～7ｍと南北に長い調査地であったため、南北主軸に沿って中央に10ｍ間隔で設置した。また、それぞれの杭から東・西壁に向かって南北主軸と直交した逃げ杭を打ち、Ａ～Ｐまでの計16のグリッドを設定した（第２図）。

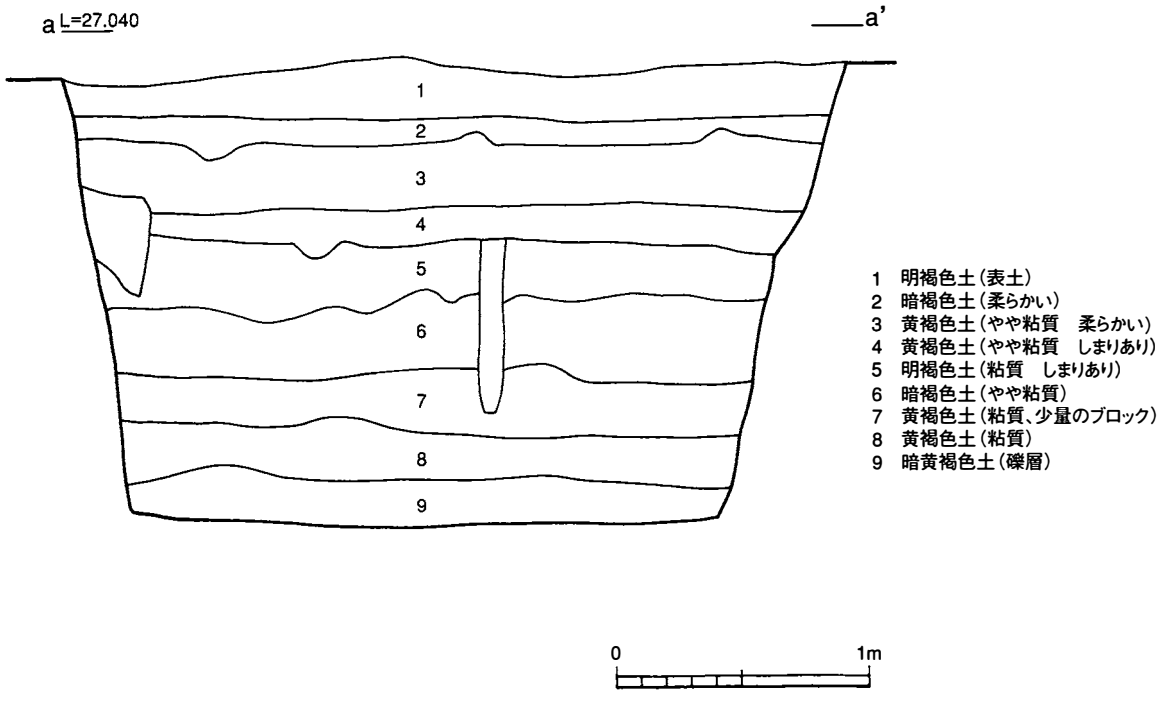
また、検出面より下層の調査は、2ｍ×2ｍのトレンチを計５本設定して行ったが、遺物・遺構は検出されなかった。

2　調査地の基本層序（第3図）

第１層は表土で、表土（耕作土）は黒色土で、赤褐色土がブロック状に混じる。また、樹根でかなり撹乱された状況が看取された。表土直下の第２層には、暗褐色土が残存する。これは熊本県下でよく見られる縄文時代前期までの遺物包含層である黒褐色土層の下層部分であり、先述したとおり調査区の北側に10㎝ほどの堆積が確認されただけで、そのほとんどが削平を受けていた。第３層には、黄褐色土が30㎝ほど堆積する。これはアカホヤ火山灰の2次堆積層と思われ、漸移的に上層の暗褐色土が混じり柔らかい。

次に、第４層は、色調は同じであるが、しまりのある土が20㎝ほど堆積する。第５層は明褐色粘質土で、第６層は暗褐色土で、しまりは弱く、僅かに粘質であった。砂礫が部分的に混じる。第７層は黄褐色粘質土で、第８層は第７層に比べ、黄味が強く、粘性が強い。

最後に、第９層は、暗黄褐色土で、2～5㎝ほどの河原石を多数含む礫層であった。その下層に砂層が確認された。



第３図　土層断面図

3　調査の経過

平成10年5月11日から平成10年6月19日にかけて調査を行った。表土剥ぎの前に、桑等の樹木の伐採作業から開始した。調査の経過は次の通りである。

（調査日誌抄録）

5月11日	草刈り開始（至5月13日）
5月14日	表土剥ぎ開始（至5月15日）
5月18日	調査区環境整備（道路際くい打ち等）
5月19日	調査区西側より遺構検出開始
5月22日	SD01検出及び掘削
5月25日	SF02（道路跡）、SD03検出
5月26日	SF02、SD03掘削開始
5月27日	SD01完掘
5月28日	SF02掘削完了
6月 3日	SK04完掘・SD05確認・SD06、07検出
6月11日	SD05掘削開始
6月15日	SB09（掘立柱建物跡）ピット群検出
6月17日	SF02、SD03、05完掘
6月19日	SB09完掘・調査終了

第3節　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

遺跡は、菊池川の中流域の河岸段丘の緩やかな斜面上にある南北に長い平坦部に位置している。菊池川は阿蘇外輪山に源を発する1級河川で、全長61.2㎞、流域面積996㎢、支流65を数える。上流部から緩やかに蛇行しながら西へ流れ、山鹿・菊水地区で大きく湾曲し南へと流れを変え、有明海へと至る。中世から水運の盛んな河川であり、玉名には中世の対外貿易の拠点「高瀬の津」跡がある。

遺跡の背後に拡がる台地は赤穂原台地と呼ばれ、もともと平坦部の多い地形で、戦時中は飛行場として利用されていた。この台地の縁辺部を菊池川が流れており、台地を避けながら大きく湾曲している。比較的流れの緩やかな地域で、竈門大橋が架けられる以前は渡し船が運行されていた。遺跡の下方には河川工事で堤防が築かれ、昔の面影を残していないが、台地の縁辺には小さな湾状の地形が見られ、川面が遺跡のすぐ近くまで来ていたことを物語る。

2　歴史的環境

菊池川流域は、旧石器時代から近世までの遺跡が多数残されている地域である。特に、古墳時代が最も華やかで、彩色を主体とする装飾古墳が多数集中する地域でもある。竈門寺原遺跡では平成6年度の発掘調査により旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物が発見されており、また、当遺跡が所在する赤穂原台地及びその縁辺にも多数の遺跡が所在する。

ここでは、これら平成6年度の発掘調査の成果を概観し、周辺にも重要な遺跡が点在するため、それら遺跡を一括して「周辺遺跡地図」（第4図）及び「周辺遺跡一覧表」（第1表、第2表）と

して掲載する。

⑴　旧石器時代

Ａ区の耕作土中からナイフ形石器３点、剥片２点が出土している。後世の耕作等で削平を受け、遺物包含層はすでに消失していたため層序は押さえられていない。Ａ区は河岸段丘の先端部、菊池川際に位置する。

⑵　縄文時代

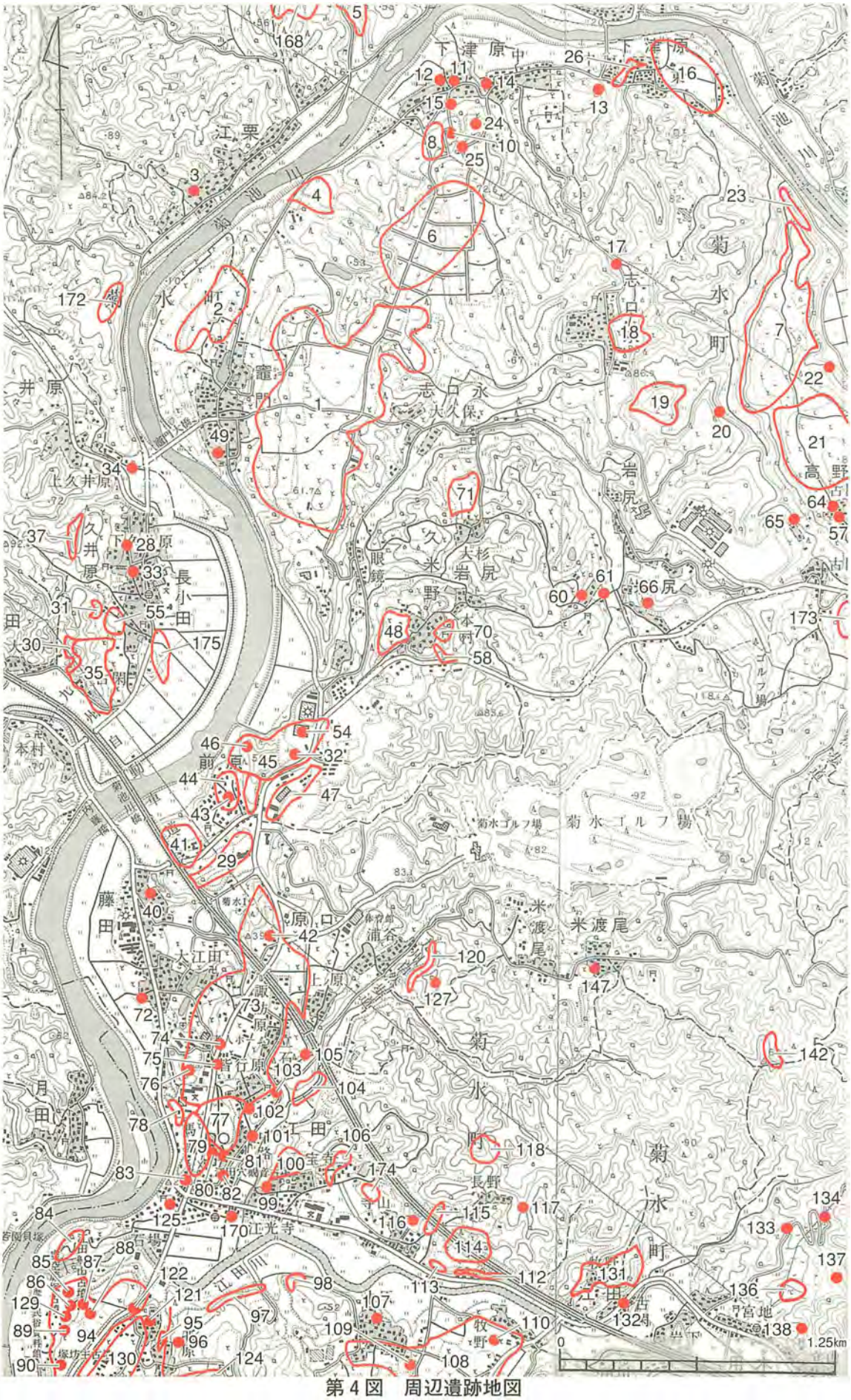
Ａ区から土坑６基が検出されている。中でも２、４、５号には底部に小ピットが検出された。遺物は後期の阿高系の土器片が１点見られるほか、後期後半の辛川式を中心に晩期までの土器片が出土している。また、石器では黒曜石を中心石材とした石鏃、石匙、楔形石器などの剥片石器類や緑泥片岩の石材を中心とした打製石斧が出土している。

⑶　弥生時代

Ａ区で、甕棺墓16基と同時期の住居址１基が検出されている。甕棺のほとんどが中期後半の黒髪式と呼ばれる小型～中型の甕棺で、混在して中期前半の須玖式の大型甕棺１基が検出されている。また、黒髪式の甕に、須玖式の鉢を蓋として使用しているものもあり、興味深い。住居内からは多数の黒髪式土器の他、鉄片が出土している。

⑷　古墳時代

円墳３基が検出されている。１号墳はＡ区に、２号墳はＤ区に、３号墳はＣ区にそれぞれ検出されている。そのうち主体部が判明した円墳は２基で、１号墳は横口式家形石棺（妻入り）、２号墳は箱式石棺である。遺物は１号墳の主体部から須恵器では透かし付き樽型瓲、樽型瓲、土師器では高坏、小型丸底壷３点が出土し、特異な遺物として鉄鏃２点、ガラス小玉多数が出土している。また、周溝からも土師器の鉢、壷が出土している。須恵器、土師器の形態的特徴から５世紀前半から中頃までと考えられている。２号墳の主体部からは滑石製有孔円盤２点が出土している。


下津原中
下津原
江栗
菊池川
菊水町
志口
志口永
大久保
井原
上久井原
久井原
長小田
眼鏡
米野
大杉
岩尻
高野
本村
前原
菊水ゴルフ場
藤田
大江田
上原
浦名
米渡尾
月田
皆行原
江田
宝寺
長野
江光寺
江田川
牧野
宮地
古閑
1.25km

第４図　周辺遺跡地図

第１表　周辺遺跡一覧表（その１）

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
365	1	志口永赤穂原	志口永　大久保	旧石器～中世	包蔵地		縄文土器
	2	竈門寺原	竈門　寺原	縄文～古墳	埋葬		弥生甕棺・箱式石棺・古墳
	3	隆恩寺跡	江栗　浦川	中世	寺社		
	4	西山田	下津原　山田	縄文	包蔵地		縄文
	5	江栗、城の尾城跡	江栗　城尾	中世	城		
	6	下津原赤穂原	下津原　赤穂原	弥生	包蔵地		弥生中後期
	7	上原	下津原　上原	弥生～古代	包蔵地		
	8	下津原	下津原　西原	古墳	埋葬		
	9	大屋横穴群	大屋　宮前	古墳	古墳		
	10	西葉山塚箱式石棺群	下津原　堂の上	古墳	埋葬		箱式石棺
	11	下津原西六地蔵	下津原　西原	中世	石造物	町	1基
	12	西五輪塔	下津原　西原	中世	石造物		
	13	古閑屋敷五輪塔	下津原　古閑屋敷	中世	石造物		
	14	金光寺跡	下津原　本村	中世	寺社		
	15	堂の上寺跡	下津原　堂の上	中世	寺社		
	16	東別当原	下津原　別当原	旧石器～弥生	包蔵地		旧石器、縄文、弥生
	17	塔面五輪塔	志口永　北屋敷	中世	石造物		
	18	本村	志口永（通称本村）	弥生	包蔵地		弥生後期
	19	城の尾城跡	志口永　城尾	中世	城		
	20	高野騒喚洞穴	高野（通称古閑）	縄文・弥生	住居		縄文土器・弥生土器
	21	高野古閑奥原	高野　奥原	縄文・弥生	包蔵地		縄文、弥生土器
	22	大屋洞穴	大屋　薬師脇	弥生～古代	住居		
	23	下津原東三瀬横穴	下津原　三ツ瀬	古墳	古墳		
	24	下津原上西原箱式石棺群	下津原　上西原	古墳	埋葬		
	25	堂の上古墳	下津原　堂の上	古墳	古墳		
	26	下津原東	下津原　東	弥生～古代	包蔵地		
	28	高野寺跡	久井原　高野	中世	寺社		
	29	前原宮田	前原　宮田・後田	弥生～古墳	埋葬		弥生中期、甕棺群
	30	内田深田浦横穴群	内田　古閑	古墳	古墳		
	31	内田古閑横穴群	内田　古閑	古墳	古墳		
	32	天御子山石棺群	竈門　天御子	古墳	埋葬		箱式石棺群
	33	永泉寺の木造薬師如来坐像	久井原　高野	中世	寺社	県	天台宗、薬師堂あり「玉名郡誌」
	34	久井原六地蔵	久井原	中世	石造物	町	
	35	内田の今城跡	内田　今城	中世	城		
	37	久井原高野横穴群	久井原　高野	古墳	古墳		
	40	西藤寺跡	藤田　古屋敷	中世	寺社		
	41	前原西原	前原　西原	弥生～古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
	42	原口長溝甕棺群	原口　長溝	弥生	埋葬		
	43	東安寺跡	前原　本居屋敷	中世	寺社		
	44	前原東安寺	前原　本居屋敷	古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
	45	天御子	竈門　天御子	弥生	包蔵地		
	46	前原石棺群	竈門　天御子	古墳	埋葬		
	47	牟田	竈門　牟田	弥生・古墳	包蔵地		
	48	久米野奥原	久米野　奥原	弥生	包蔵地		弥生後期
	49	高福寺跡	竈門　緑田	中世	寺社		
	53	前原陣	前原　本居屋敷	弥生・古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
	54	蛇田石棺群	竈門　蛇田	古墳	埋葬		家形・舟形石棺墓
	55	内田深田浦	内田	弥生・古墳	包蔵地		
	57	高野古閑	高野　古閑	縄文・弥生	包蔵地		縄文中・後期土器、弥生後期
	58	千ヶ谷横穴群	久米野　後田	古墳	古墳		久米野横穴群
	59	高野古閑古墳	高野　古閑屋敷	古墳	古墳		円墳
	60	岩尻五輪塔	岩尻　上村	中世	石造物		
	61	岩尻六地蔵	岩尻　源藤	中世	石造物	町	1基
	64	古閑五輪塔	高野　古閑	中世	石造物		
	65	高薬寺跡	高野　護麻堂	中世	寺社		
	66	西頭（巌）寺跡	岩尻　源藤	中世	寺社		
	67	高乗寺跡	高野　西本村	中世	寺社		
	70	久米野永泉	久米野　千が谷	中世	寺社		
	71	岩尻大杉	岩尻　大杉原	弥生	包蔵地		弥生
	72	観音堂五輪塔	原口　大江田	中世	石造物		
	73	諏訪原	江田　諏訪原	弥生～平安	集落		弥生土器・須恵器・土師器
	74	札木甕棺群	江田　皆行原	弥生	埋葬		弥生中期
	75	江田駅跡推定地	江田　東	古代	包蔵地		
	76	皆行原狸が浦横穴群	江田　狸ヶ浦	古墳	古墳		
	77	中小路原	江田　中小路原	古代	包蔵地		
	78	いご浦横穴	江田　氏無	古墳	古墳		
	79	馬場堂ノ上	江田　堂ノ上	弥生・古墳	埋葬		弥生後期　甕棺
	80	若宮古墳	江田　中小路	古墳	古墳	県	前方後円墳
	81	若宮舟形石棺	江田　中小路	古墳	埋葬		
	82	江田穴観音古墳	江田　中小路	古墳	古墳	国	勾玉・金環、円墳
	83	堂ノ上宝篋印塔	江田　堂ノ上	中世	石造物		
	84	若園貝塚	江田　若園	縄文	貝塚		
	85	清原石人	江田　清原	古墳	石造物	県	石製腰掛、石殿

第２表　周辺遺跡一覧表（その２）

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
365	86	京塚古墳	江田　清原	古墳	古墳		
	87	清原五輪塔	江田　清原	中世	石造物		
	88	江田船山古墳	江田　大久保原	古墳	古墳	国	銅鏡・銀象嵌銘文太刀・剣・鎖・冠・沓など
	89	虚空蔵塚古墳	江田　清原平	古墳	古墳	国	
	90	塚坊主古墳	瀬川　清水原	古墳	古墳	国	
	94	清原	江田　大久保原ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文後期・弥生後期
	95	北原横穴群	瀬川　北原	古墳	古墳		
	96	長刀横穴群	瀬川　長力	古墳	古墳	県	1号が県指定・線刻の装飾がある
	97	鶯原入口横穴	瀬川　東長力	古墳	古墳		
	98	中原ボーシ下横穴群	瀬川　北帽子	古墳	古墳		
	99	江光寺・江光寺五輪塔群	江田　江光寺	中世	寺社		50基
	100	江田城跡（城山城跡）	江田　江光寺	中世	城		
	101	真光寺跡	江田　中小路	中世	寺社		
	102	光徳寺跡	江田　皆行原	中世	寺社		
	103	天神平石棺墓	江田　天神平	古墳	埋葬		
	104	立石島崎	原口　立石	弥生	埋葬		弥生中後期
	105	立石寺跡	原口　野付		寺社		
	106	三宝寺跡	江田　三宝寺	中世	寺社		
	107	中原寺跡	瀬川　中原	中世	寺社		石塔群
	108	西中原	瀬川　西中原	旧石器～古代	包蔵地		旧石器・マイクロコア・ナイフ
	109	西原長者屋敷跡	瀬川　西原	中世	包蔵地		
	110	中原北池の本石棺	瀬川　池元	弥生～古墳	埋葬		家形石棺
	112	牧野横穴群	江田　牧野	古墳	古墳		
	113	寺山小原坂横穴群	江田　小原	古墳	古墳		
	114	寺山小原	江田　小原	弥生	包蔵地		弥生中期
	115	寺山宮の東横穴群	江田　寺山	古墳	古墳		
	116	寺山寺跡	江田　寺山	中世	寺社		
	117	園五輪塔	江田　長野	中世	石造物		
	118	乙城跡	江田　長野	中世	城		
	120	どんこ山横穴群	原口　浦谷	古墳	古墳		
	121	北原寺跡	瀬川　北原	縄文	包蔵地		縄文土器・石器・矢じり
	122	大久保舟形石棺	江田　大久保	弥生・古墳	埋葬		
	124	トンカラリン	瀬川　長力	縄文～近代	建造物		
	125	熊野宮宝塔	江田　神屋敷	中世	石造物	県	
	127	土喰古墳	江田　土喰	古墳	埋葬		
	129	清原舟形石棺	江田　清原	古墳	埋葬		舟形石棺
	130	松坂原	瀬川　松坂原	弥生～古代	包蔵地		
	131	牧野城跡	江田　牧野	中世	城		中世城、「玉名郡誌」
	132	古閑の五輪塔群	用木　北富尾	中世	石造物		五輪塔
	133	法蓮寺跡	用木（通称法蓮寺）	中世	寺社		
	134	七曲り五輪塔群	用木　観音平	中世	石造物		
	136	用木城跡	用木（通称城の尾）	中世	城		
	137	観音平寺跡	用木（通称観音平）	中世	寺社		
	138	宗林庵跡	用木（通称立山）	中世	寺社		
	142	米渡尾城跡	米渡尾	中世	城		
	147	西塔寺跡	米渡尾　東屋敷	中世	寺社		
	168	江栗、面頓寺	江栗	弥生時代中期	包蔵地		
	170	横枕宝塔	江田　横枕	中世	石造物	町	延慶3年の銘
	172	傾成が塔	久井原　傾成が塔	古墳	包蔵地		石棺群
	173	高野本村	高野　本村	弥生	包蔵地		弥生中期
	174	寺上前	江田　寺上前	旧石器	包蔵地		
	175	宮の前	内田　宮の前	弥生	埋葬		甕棺群

第２章　遺構と遺物

第１節　遺　　構

１　調査地全景（第５図）

前章で述べたとおり、調査地はすでに削平を受けていたため遺物包含層の大半はすでに消失していた。調査地のうち地形的に低い調査地北辺から南に19ｍまで僅かに暗褐色土層が残存していた。この暗褐色土層からは縄文土器の破片が数点検出され、縄文時代の遺物包含層であることが確認された。

また、遺構も南側は削平とともに消失したと思われ、そのほとんどが北側で確認された。遺構は、掘立柱建物跡１棟、道路跡１条、土坑１基、溝跡５条が検出された。

２　掘立柱建物跡

[SB09]（第６図）

調査区の東側に位置する掘立柱建物跡である。西側に３基の小ピットを有することを特徴とする。残念ながら、東側半分は道路に阻まれ、調査をすることができなかった。

遺構の平面形状は南北桁行３間（8.7ｍ）、東西梁行１間以上（2.4ｍ以上）で、柱間寸法は南北桁2.9ｍ、東西梁2.4ｍである。柱穴は計６基確認されており、径33.0～38.0㎝の円形で、深さ50.0～53.0㎝である。ただし、Ｐ－１はSD06により削られ、Ｐ－８はSF02により削られているため、計測値には入れない。埋土は暗褐色を呈す。また、いずれの柱穴からも柱痕跡が確認されており、15.0～18.0㎝程の黒色で、柱穴底まで続く。それぞれの柱穴底はやや硬化していた。

また、建物北側の３基の小柱穴は柱間の中程に配置されている。径21.0～22.0㎝の円形で、深さ11.0㎝と浅い。埋土は暗褐色土であった。柱痕跡は確認されなかった。これらの小柱穴は「下屋」と呼ばれる付帯施設の柱穴と考えられる。

遺物は、Ｐ－１の埋土中から、ほぼ完形の土師器（小皿）（5）、黒色土器椀の口縁部片（1）が出土した。また、Ｐ－４の埋土中から石鍋片（17）と土鍋（10）が胴部を含めたまとまった形で出土した。Ｐ－１、Ｐ－４とともに隅柱であるため、儀礼的に柱穴に埋納された可能性が考えられる。

３　道路跡

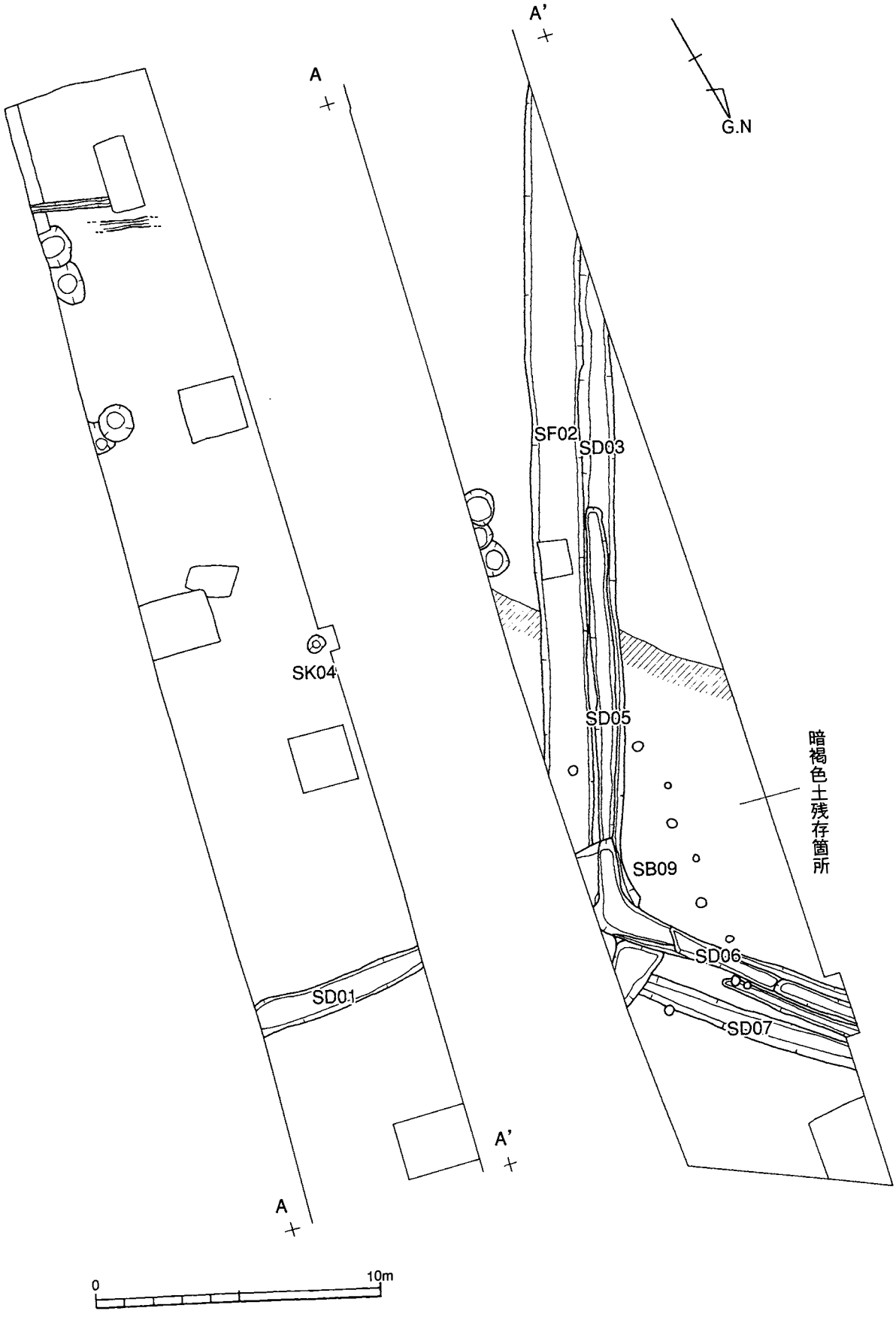
[SF02]（第７図）

調査区の南西側から北東方向に延びる掘り込みを有する道路跡である。北東方向に延びる旧道とほぼ一直線に重なるものと思われる。

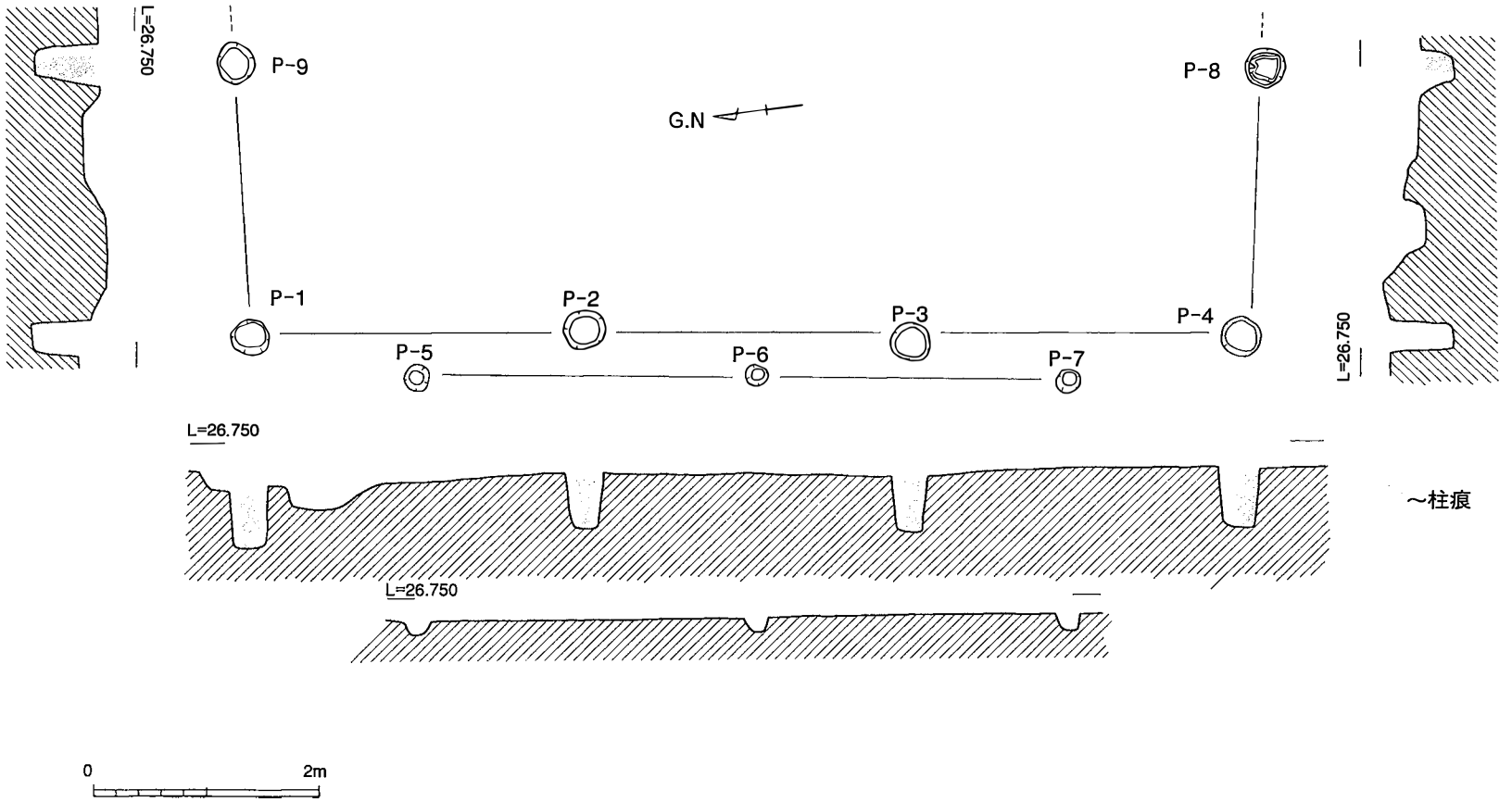
遺構の検出全長は27.4ｍである。掘り込みの断面形状は検出面の幅180.0～188.0㎝、深さ30.0～32.0㎝の平底で、底から緩やかに立ちあがる。底幅は140.0～160.0㎝である。底には幅94.0～106.0㎝の範囲で黄褐色粘質土が硬化しているのが確認された。埋土は暗茶褐色を呈し、黄褐色粒、カーボンを多量に含む。また、埋土の上面も硬化しており、埋土自体、硬くしまった堆積を示す。

遺物は、埋土中から旧石器、打製石斧、土師器、青磁、白磁と幅広い時代の遺物が確認され、しかも細片であった。

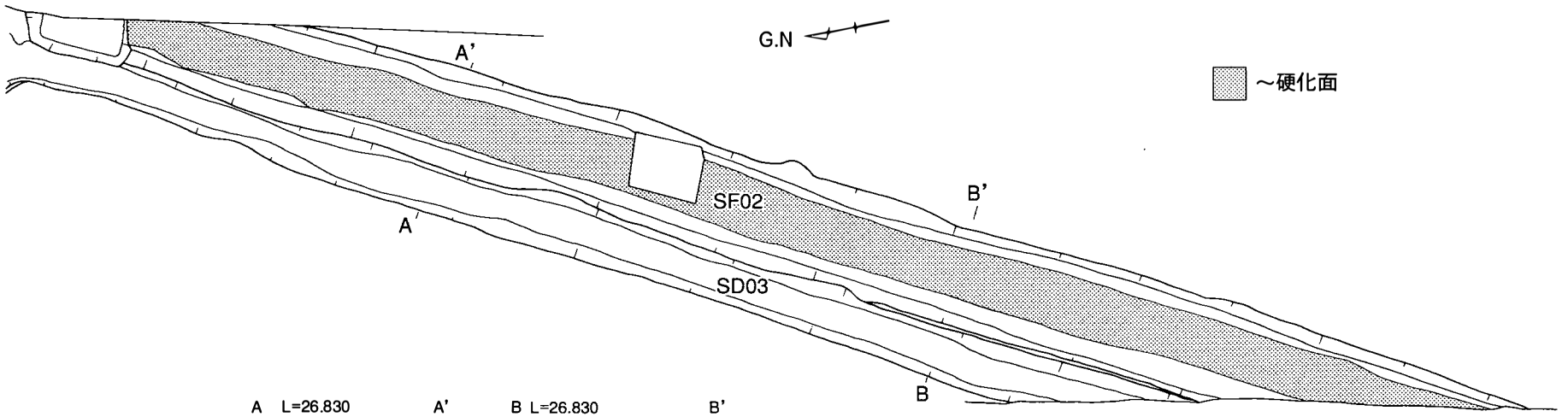
さまざまな時代の遺物が細片で多数混じることから、周辺の土を一度に埋め戻したものと思われる。

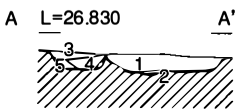

A'
A
G.N
SF02
SD03
SK04
SD05
暗褐色土残存箇所
SB09
SD06
SD01
SD07
A'
A
0
10m

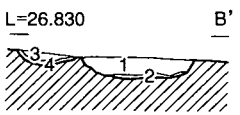
第5図　遺構配置図



第6図　SB09遺構実測図





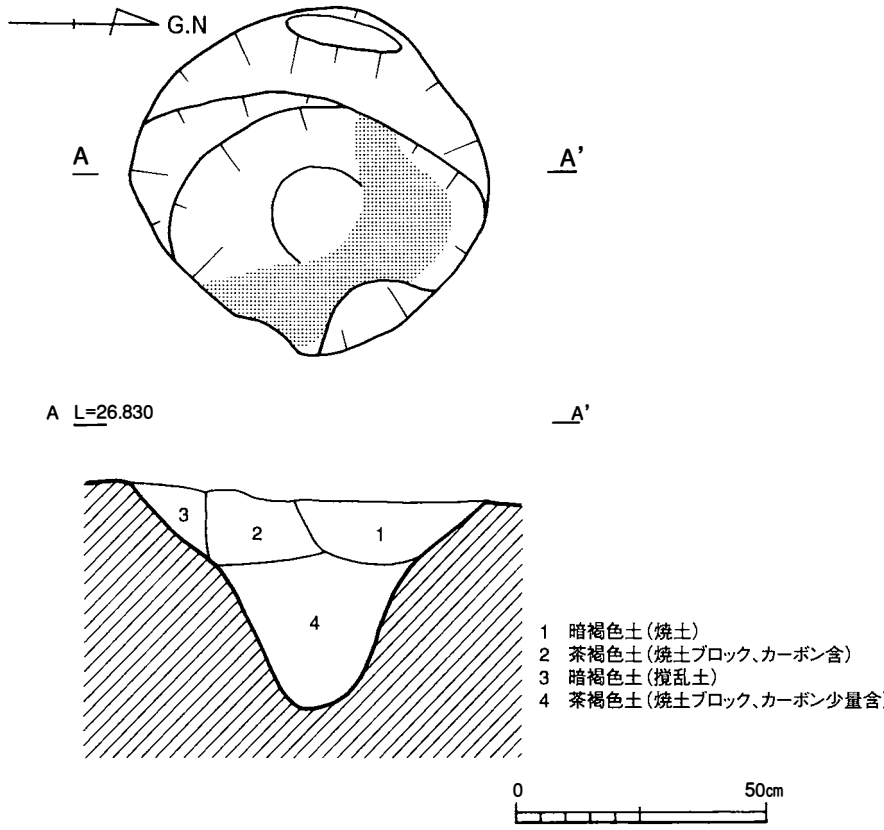


1 暗褐色土
（やや硬化　黄褐色粒　カーボン含）
2 暗褐色土（硬化）
3 暗褐色土
（ややしまる　黄褐色ブロックを多量に含）
4 暗褐色土
（ややしまる　黄褐色粒含）
5 暗褐色土
（柔らかい　黄褐色ブロック含）

1 暗褐色土
（やや硬化　黄褐色粒とカーボン含）
2 暗褐色土（硬化）
3 暗褐色土
（ややしまる　黄褐色粒含）
4 暗褐色土
（柔らかい　黄褐色ブロック含）

0　4m

第７図　SF02遺構実測図



第8図　SK04遺構実測図

4　土　　坑

[SK04](第8図)

調査区の南側に位置する土坑である。焼土、カーボンを多量に含むことから焼土坑と思われる。

遺構の平面形状は、東西69.0cm、南北72.0cmのほぼ円形で、断面形状は、深さ12.0cmまでゆるやかに傾斜し、それより下は傾斜を増す2段の掘り込みを有す。深さは56.0cmである。

埋土は基本的には暗褐色を呈し、焼土、カーボンは上層に集中するが、底部までそれらは混入する。

遺物は出土しなかった。

5　溝　　跡

[SD01](第9図)

調査区の中央付近で検出された南北に延びる溝跡である。

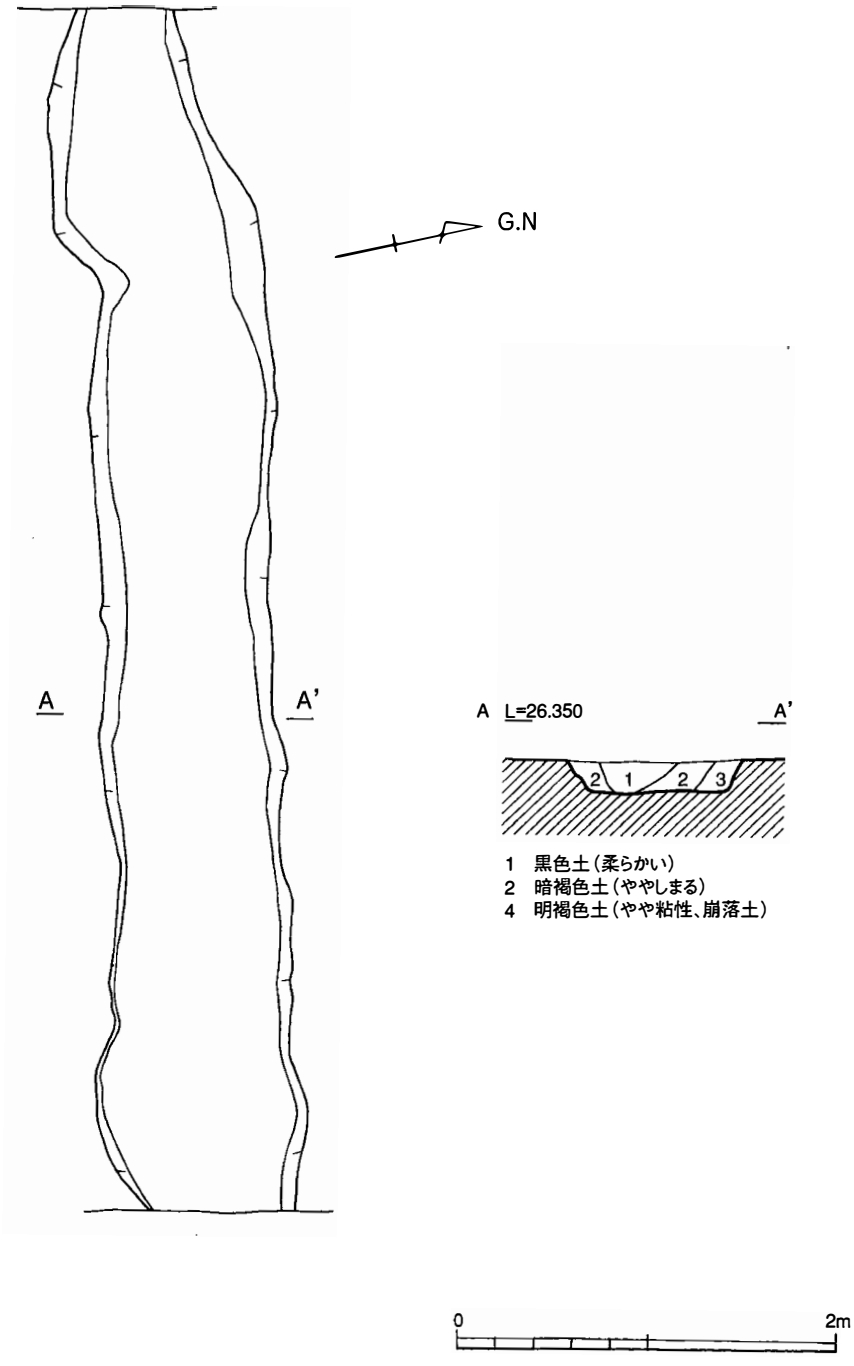
検出全長は6.30mである。断面形態は検出幅93.0cm、深さ15.0cmの平底で、底幅は75.0cmである。埋土はレンズ状に堆積しており、中央に黒色土、その外側には暗褐色土、壁近くには焼土、カーボンを含む明褐色土（しまりあり）である。遺物は出土しなかった。

[SD03](第7図)

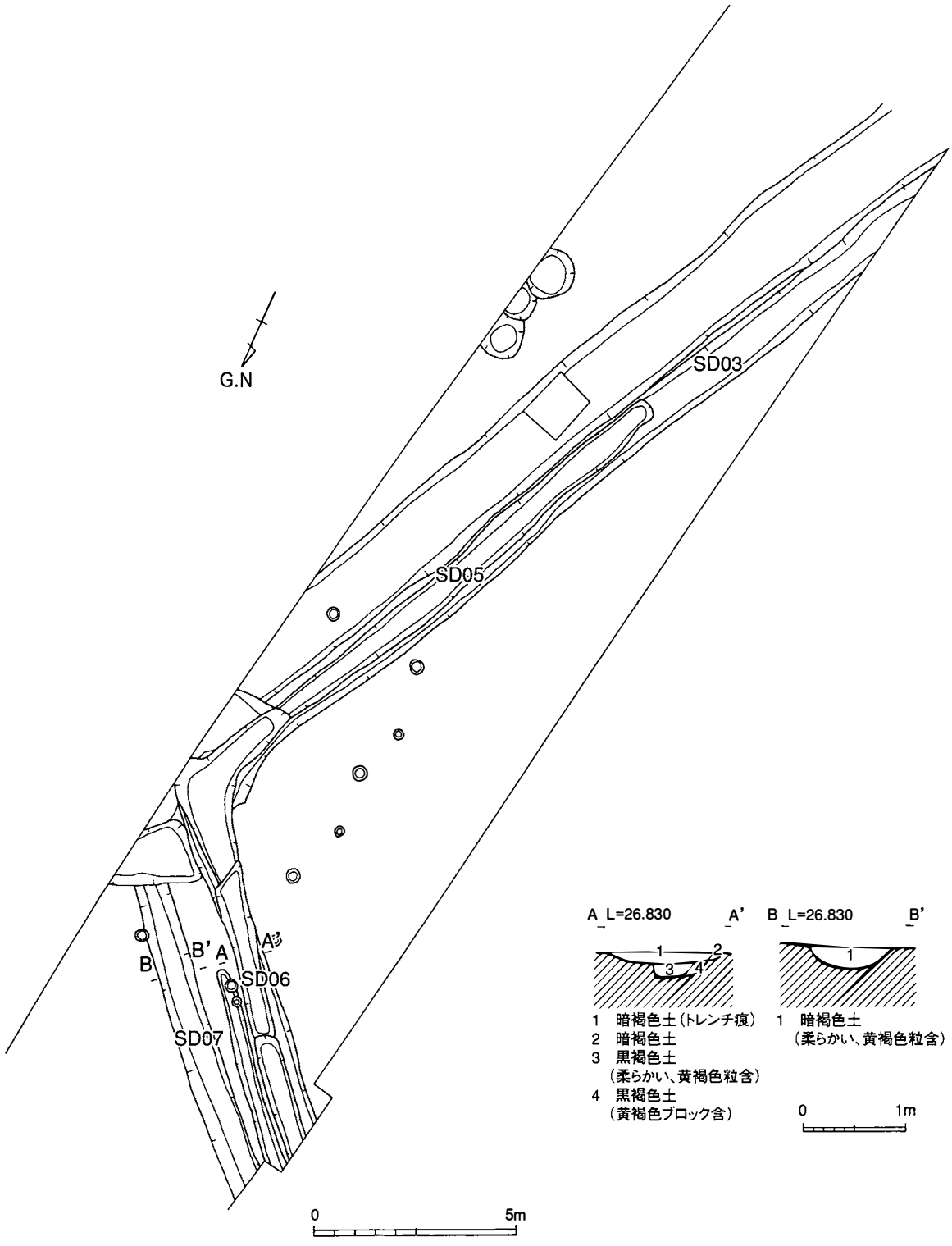
SF02と平行して延びる溝跡である。南西から北東に延びる。

検出全長は23.2mである。断面形状はレンズ状を呈する。検出幅92.0cm、深さ20.0cmである。埋土は暗黄褐色を呈し、黄褐色粒が混入する。

遺物は、埋土中から土師器（小皿）片（6）、青磁椀片（24）が出土した。



第９図　SD01遺構実測図



第10図　SD03・05・06・07遺構実測図

[SD05・06]（第10図）

SF02と平行して北東方向（SD05）に延び、北西方向（SD06）に直角に曲がる溝跡である。SD05部分はSD03とほぼ重なるが、SD03に先行することが確認された。

検出全長はSD03に切られたため明確には言えないが、北東方向が少なくとも約14.5ｍで、北西方向が8.8ｍである。北に向かって段差が４箇所確認された。断面形状はやや平底を呈し、直立気味に立ちあがる。深さは検出面から24.0～25.0㎝である。埋土は暗褐色を呈し、黄褐色土がブロック状に混入する。

遺物は、埋土中から土師器（椀）の細片（２・３）が出土した。

[SD07]（第10図）

SF02と垂直に延び、SD06と平行に延びる溝跡である。

検出全長は8.1ｍである。断面形状は検出幅80.0㎝、深さ18.0㎝のレンズ状を呈する。埋土は暗褐色土であった。遺物は出土しなかった。

第２節　遺　　物

１　黒色土器

当遺跡からは椀の口縁部片１点のみ出土した。

１は椀の口縁部片である。復元口径は15.2㎝である。なだらかに内湾しながら立ちあがり、口縁端部は丸く、外面は細かな斜位のミガキを施した後、口縁部付近と底部側をナデ消している。また、内面は粗いミガキを施した後、口縁部をナデ消している。色調は外面暗黄褐色、内面淡黄褐色を呈するが、内外面ともに黒色が僅かに認められ、黒色土器Ｂ類に属す。胎土は1～2㎜大の砂粒、金雲母をわずかに含む。焼成は良好である。

２　土師器

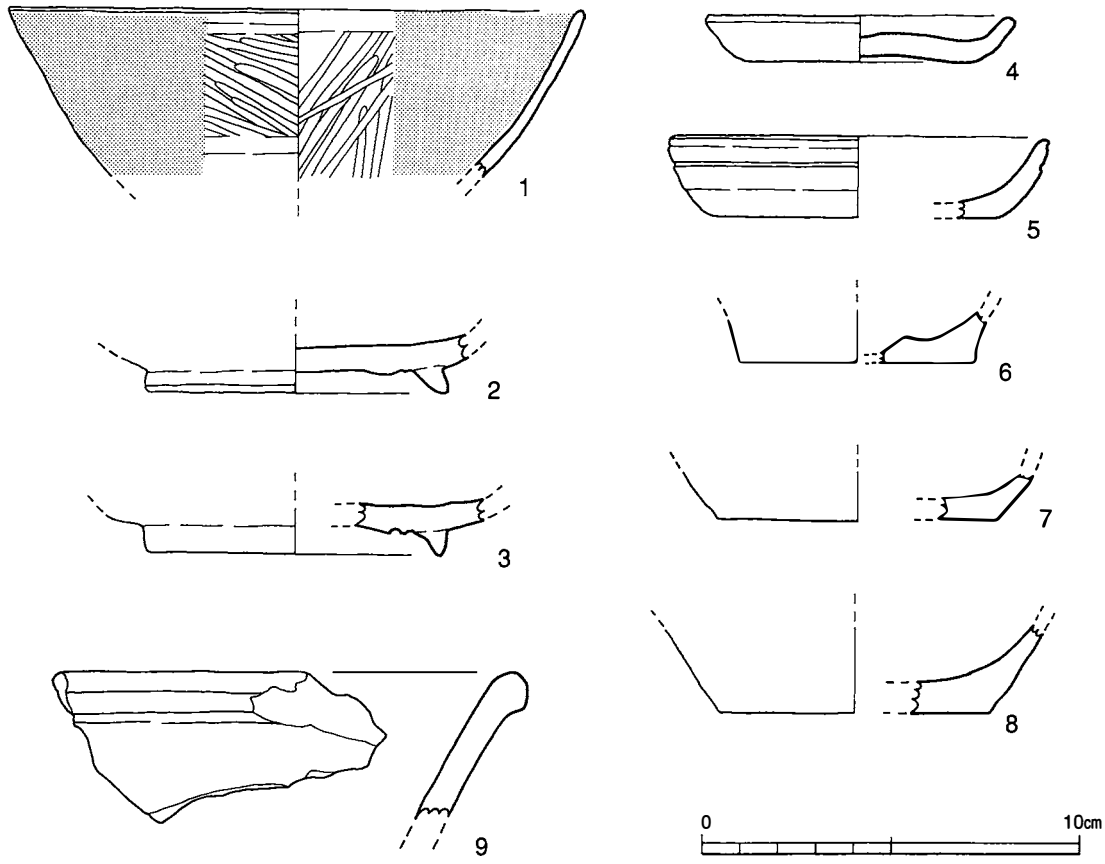
当遺跡からは、椀、杯、小皿、鍋の器種が出土した。

２は椀の底部片である。高台の復元内径は7.8㎝である。高台は外に開き、端部を丸く仕上げる。やや形骸化している。体部は椀状に丸く立ちあがる形態と思われる。調整は、高台を含む底部は丁寧な回転ナデ調整で、外面は粗いナデ調整を施す。内面は不整方向のナデ調整を施す。色調は淡黄褐色で、胎土に２㎜大の砂粒を少々含む。焼成はやや良。

３は椀の底部片である。高台の復元内径は7.4㎝である。高台は直立し、端部は尖り気味。やや形骸化している。体部は椀状に丸く立ちあがる形態と思われる。調整は、底部は工具で回転ケズリ、高台から器壁は丁寧な回転ナデ調整を施す。内面も丁寧にナデている。色調は淡黄褐色で、胎土に石英を少々。焼成は良好。

４は小皿で、ほぼ完形に近い状態で出土した。復元口径は8.2㎝で、高さ1.2㎝、復元底部径は6.0㎝である。体部はやや外に開き、口縁端部は丸い。底部はやや上げ底。調整は、体部外面から見込み部まで回転ナデ調整を施し、見込み部中央に軽く不整方向のナデを施す。底部は糸切り未調整。色調は内面淡黄褐色、外面赤褐色で、胎土に2～3㎜大の砂粒、赤褐色粒を多量に含む。焼成は良好。

５は小皿の口縁部片である。復元口径9.8㎝、高さ2.1㎝、底部の復元径7.4㎝である。体部は内湾し



第11図　遺物実測図(1)

ながら立ちあがり、口縁端部は丸く仕上げる。全体的に器壁は肥厚している。調整は、見込み部は丁寧な回転ナデで仕上げ、体部外面上半分は工具で回転ナデ、下半分は粗いナデ調整を施す。底部は糸切り未調整。色調は、淡黄褐色で、片岩を多数含む。焼成は良好である。

6は小皿の底部片である。底部の復元径は6.2cmである。底部内面には凹凸があり、全体的に器壁は肥厚している。調整は、見込み、体部外面には回転ナデ調整を施す。底部は糸切り未調整。色調は橙色で、胎土に石英、金雲母を多く含む。焼成は良好である。

7は杯の底部片である。底部の復元径は7.4cmである。全体的に器壁は薄く、体部はやや内湾気味に開く。調整は、底部は糸切り未調整。見込み、体部外面は回転ナデ調整を施す。色調は褐色で、胎土に1～4mm大の砂粒を多量に含む。焼成はやや良。

8は杯の底部片である。底部の復元径は7.2cmである。底部は比較的厚く、体部は内湾気味に立ちあがる。調整は、底部に不整方向のナデを施し、体部外面、見込み部には丁寧な回転ナデ調整を施す。色調は褐色で、煤がやや付着している。胎土に1～4mm大の砂粒を多量に含む。焼成はやや良。

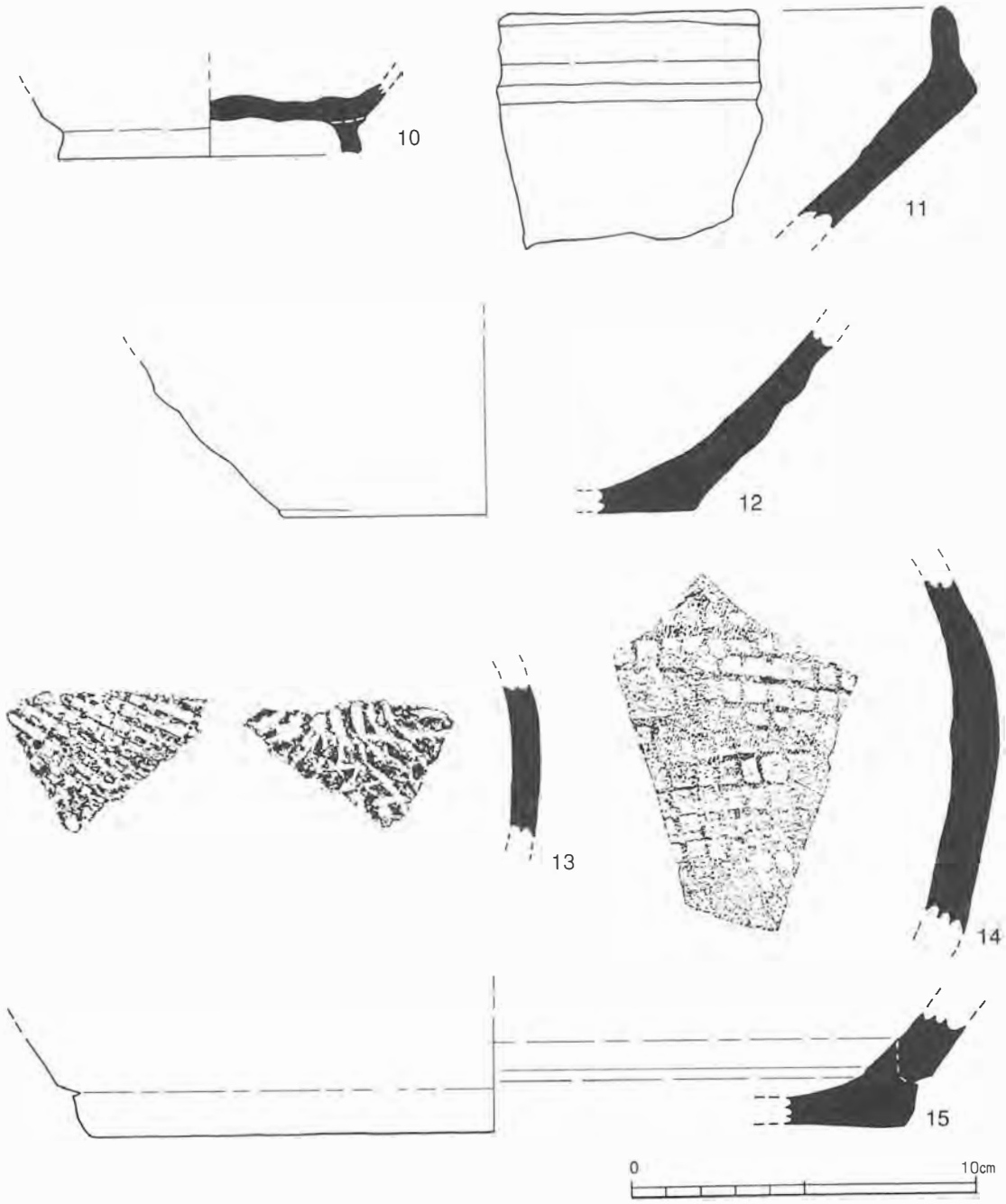
9は土鍋の口縁部片である。口径は復元できない。口縁部は外に開き、端部を玉縁状に丸く仕上げる。調整は内面を斜位にナデ調整で、口縁部近くは回転ナデ調整を施す。外面は回転ナデ調整を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に2～3mm大の砂粒、石英、片岩を多量に含む。焼成はやや良。

この土器片の同一個体で、胴部片が多数出土しているが、部分的に2次焼成痕が見られる。

3　須恵器

器種は、椀、鉢、甕が出土し、いずれも細片である。

10は椀の底部片である。高台の復元内径は7.6cmである。高台は明瞭で比較的長く、端部に向かっ



第12図　遺物実測図(2)

てやや広がり、端部は平たい。見込み部に調整でできた凹凸がある。調整は、高台から体部は回転ナデ調整を施すが、高台内は未調整。見込み部は回転ナデ調整。色調は灰色で、胎土に石英がやや混じる。焼成は良好である。

11は鉢の口縁部片である。口径は復元できない。体部は外反気味に延び、口縁部は端部を上方につまみあげている。調整は、内面は工具を当て回転ナデ調整を施し、口縁部は回転ナデ調整を施す。外面は横ナデを施す。色調は外面淡黄褐色、内面灰色で、胎土は粗雑で、3㎜大の砂粒、石英を含む。焼成は良好である。

12は鉢の底部片である。底部の復元径は12.2㎝である。底部は比較的薄く、体部は斜方向に直線的に立ちあがる。調整は、体部内面回転ナデ調整で、底部内面に不整方向のナデ、体部外面にナデ調整を施す。色調は灰色で、胎土に1～3㎜大の砂粒、片岩を含み粗雑である。焼成はやや良。

13は甕の胴部片である。長胴型と思われ、破片上位に胴部最大径を有する。外面に斜格子叩き、内面に同心円の当て具痕を残す。色調は灰色で、胎土に石英を少々含む。焼成はやや良。

14は甕の胴部片である。長胴型で、破片中位上に胴部最大径を有するものと思われる。外面に格子叩きを施し、内面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色で、胎土に石英を多量に含む。焼成は良好である。

15は甕の底部片である。底部の復元径は23.8㎝である。底部は比較的薄く、体部は直線的にやや外に開く。体部器壁は厚い。底部と体部の境付近で接合痕が確認された。調整は、底部は不整方向のナデ調整で、その他は、回転ナデ調整を施す。色調は灰色で、胎土は粗雑で、2～3㎜大の砂粒、石英を少々含む。焼成は良好である。

4　瓦質土器

器種は深鉢が出土した。

16は深鉢の胴部片である。底部付近と思われ、胴部は直線的に立ちあがり、突帯から内湾気味に立ちあがる。突帯は小さく、つまみ出している。調整は、外面に丁寧なミガキ調整を施す。色調は、外面黒褐色、内面褐色を呈し、胎土に2～5㎜大の砂粒、石英、片岩を含む。焼成は良好である。

5　土　　錘

17は土錘片で、片側端が欠損している。残存長3.6㎝、最大幅1.1㎝、孔径0.3㎝で、両側端がしぼむ。残存重量は2.5ｇである。色調は黒色を呈し、胎土に片岩、石英、黒雲母を少々含む。焼成はやや良。

18は土錘である。最大長4.4㎝、最大幅1.3㎝、孔径0.4㎝で、両側端がややしぼむ。重さは5.0ｇである。色調は赤褐色を呈し、胎土に片岩、石英を少々含む。焼成は良好である。

6　石　　鍋

1点のみ出土した。

19は石鍋の口縁部片である。口径は復元できない。胴部からやや内湾しながら立ちあがり、口縁端部は平たく仕上げる。調整は内面を細かく削り、端部付近を丁寧に磨く。外面は粗いケズリ調整を施した後、丁寧に磨く。ケズリ痕が一部残存する。胴部内面は未調整である。色調は暗褐色を呈するが、口縁部付近が赤変する。石材は滑石である。

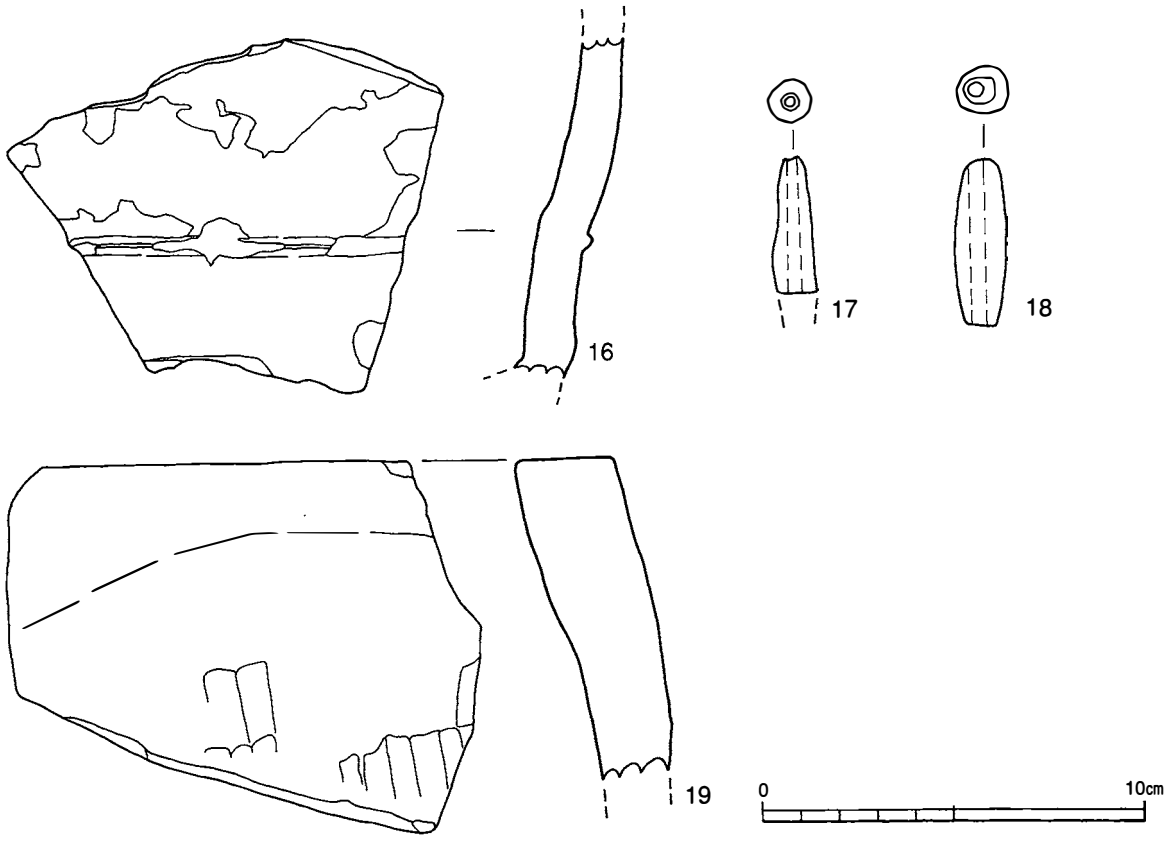
7　白磁・青磁

20は白磁皿の口縁部片である。復元口径は6.6㎝である。体部は内湾気味に立ちあがり、口縁端部は外に開く。調整は工具を使った回転ナデ調整を施す。施釉は、体部外面中位より下は無釉。わずかに釉垂れする。色調は暗めの灰白色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。

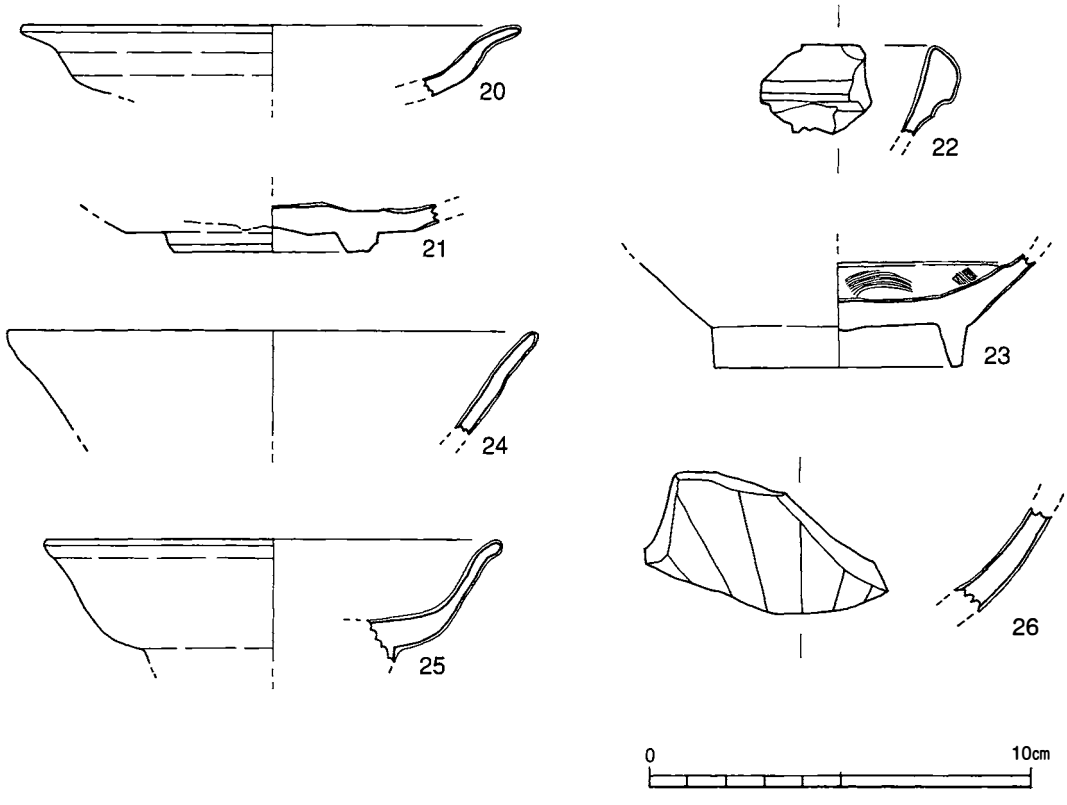
21は白磁皿の底部片である。高台の復元径は5.2㎝である。高台は比較的低く、肥厚している。端部は平たい。体部は外に開くものと思われる。釉は内面に積み重ねによる蛇の目状に釉剥げが見られるほか全面に施釉し、高台及び体部外面下部は無釉。わずかに釉垂れが確認された。色調は灰白色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

22は白磁椀の口縁部片である。口縁端部が玉縁を為す碗である。全面に施釉。色調は灰白色で、胎土は精選されている。焼成は良好である。

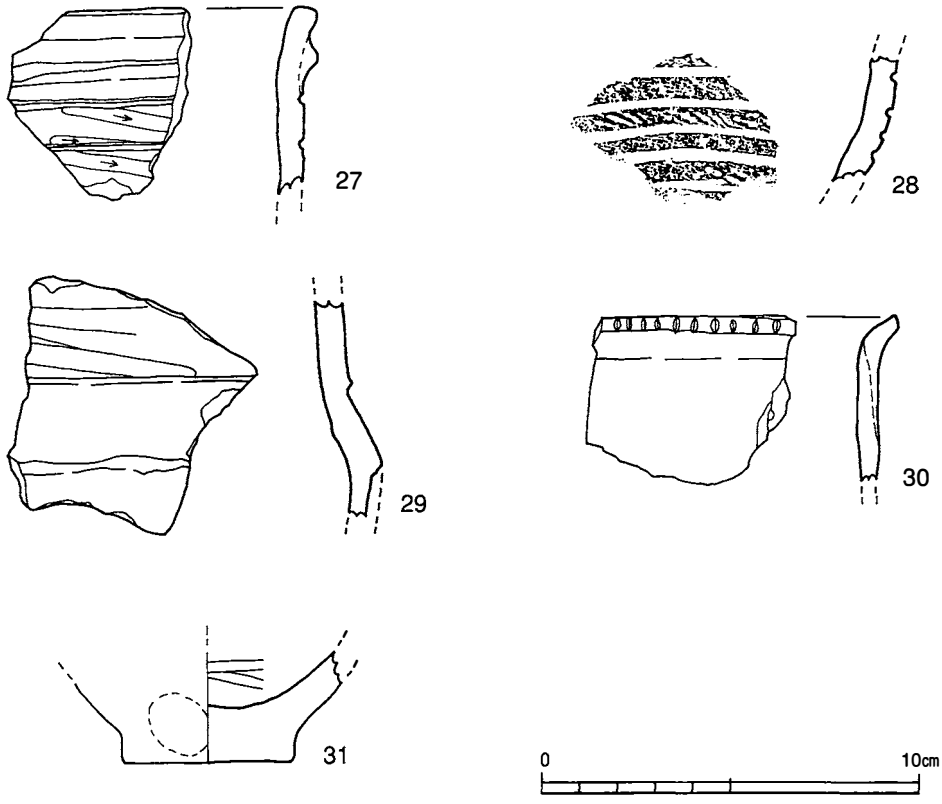
23は白磁椀の底部片である。高台の復元径は6.4㎝である。高台は細く垂直で、端部は平たく仕上



第13図　遺物実測図(3)



第14図　遺物実測図(4)



第15図　遺物実測図(5)

げられている。体部は直線的に延びる。内面に刷け状工具で流線文を施す。釉は見込み部及び体部外面に施し、高台は無釉。色調は灰白色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

24は青磁椀の口縁部片である。復元口径は14.0㎝である。口縁部付近でやや外反する。釉は全面に施されている。色調は緑灰色で、胎土はやや精選されている。焼成は良好である。

25は青磁皿片である。復元口径6.0㎝で比較的小さい。体部は内湾しながら立ちあがり、口縁部付近で外反する。底部は比較的肥厚する。釉は全面に施されている。色調は緑黄色で、胎土は精選されている。焼成は良好である。貫入が入る。

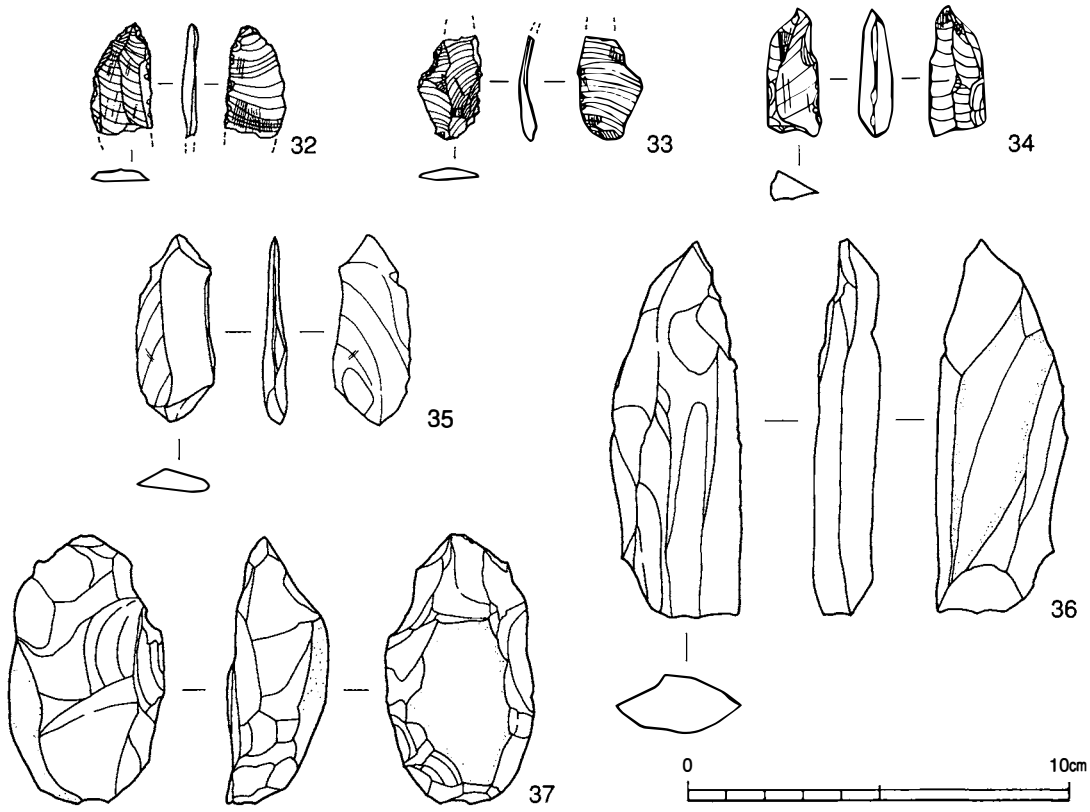
26は青磁椀の胴部片である。体部外面に鎬蓮弁文を施す。釉は内外面に施されている。色調は緑黄色で、胎土は赤味を帯びる。焼成はやや良。

8　縄文土器

27は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外傾し、口唇部はやや丸みを帯びる。口唇部直下に貼付突帯を有し、突帯下にへら状工具により２条の凹線が入る。内面はナデ調整、外面はナデ調整を施すが、突帯下に斜位のケズリ調整を施す。色調は淡黄褐色で、胎土に1～3㎜大の砂粒、石英を含む。焼成は良好である。

28は深鉢の胴部片である。胴部はやや内湾しながら立ちあがるものと思われる。横位の5条の凹線で区画帯をつくり、交互に縄文を施す磨消縄文と呼ばれる文様である。内面は横位のケズリ調整のみ。色調は外面褐色、内面暗褐色で、胎土に1～2㎜大の砂粒、石英、黒雲母を少々含む。焼成は良好である。

29は深鉢の胴部片である。27と同一個体である可能性が高い。胴部最大径で明瞭に屈曲し、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。調整は内面にケズリ後、屈曲箇所より上をナデ調整を施し、外面はナデ



第16図　遺物実測図(6)

調整であるが、屈曲箇所より上の突帯上位に上から下へと斜位のケズリ調整を施す。色調は褐色で、胎土に1～3㎜大の多量の砂粒、石英、片岩を含む。焼成は良好である。

30は甕形土器の口縁部片である。胴部はほぼ垂直に立ちあがり、口唇部付近で外に開く。全面ナデ調整を施し、口唇部に刻みを入れる。色調は暗褐色を呈し、胎土に1～5㎜大の砂粒、石英、黒雲母、赤褐色粒を含む。焼成はやや良。

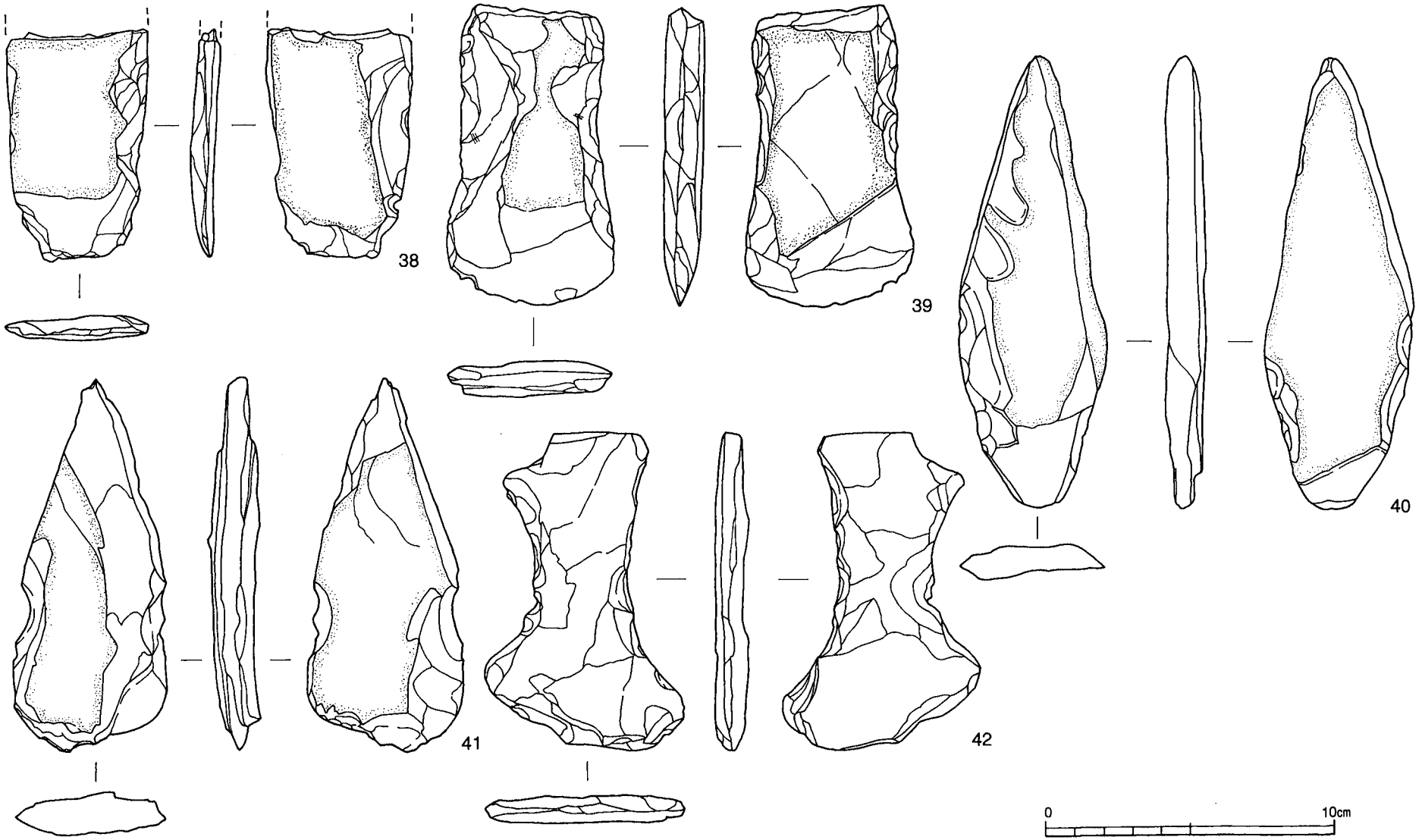
31は深鉢の底部片である。復元底径4.4㎝である。平底（平高台）を呈する。調整は外面くびれ部に指頭痕、内面底部付近に横位のケズリ調整を施す。色調は外面暗褐色、内面淡黄褐色で、胎土に1～2㎜大の砂粒、石英、黒雲母を含む。焼成はやや良好である。

9　石器

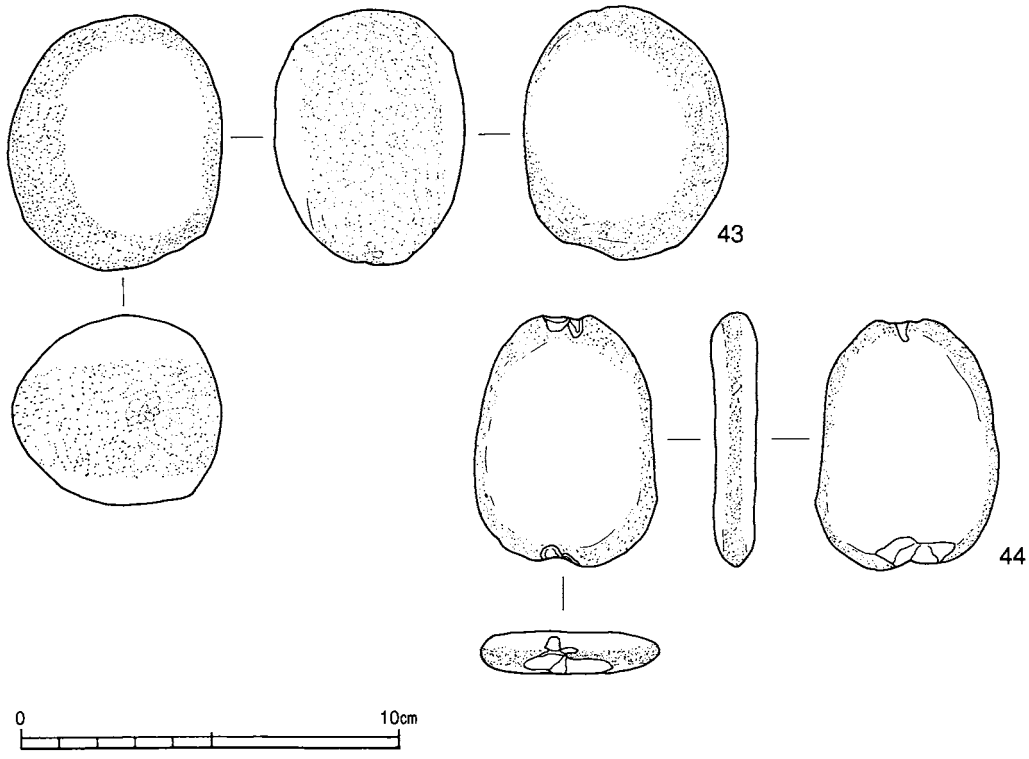
32は使用痕のある縦長剥片である。最大長3.0㎝、最大幅1.5㎝、厚さ0.3㎝で、重さは1.0ｇである。縦長の扁平な剥片で、片側縁に一部使用痕が確認された。表面には扁平にするための加工が施されている。基部は欠損している。石材は黒曜石である。

33は加工痕のある縦長剥片である。最大長2.7㎝、最大幅1.6㎝、厚さ0.3㎝で、重さは1.0ｇである。縦長の扁平な剥片で、片側からの細かい剥離により抉り部を作り出している。刃部は欠損している。石材は黒曜石である。

34は使用痕のある縦長剥片である。最大長3.4㎝、最大幅1.3㎝、厚さ0.9㎝で、重さは3.0ｇである。断面二等辺三角形の肥厚した剥片で、鋭角の片側縁には刃部の2次調整痕は見られないが、使用痕が確認された。刃部として十分鋭いため、形態からナイフ形石器に近いものと思われる。石材は黒曜石である。



第17図　遺物実測図(7)



第18図　遺物実測図(8)

35は横長剥片である。最大長4.9㎝、最大幅2.0㎝、厚さ0.6㎝で、重さは7.0ｇである。横長の扁平な剥片で、礫面を残しながら、両側縁から剥離し、先端部を山形に造り出している。石材は風化が進んでいるものの、安山岩系と思われる。

36は縦長剥片である。最大長9.9㎝、最大幅3.4㎝、厚さ1.5㎝で、重さ55.0ｇである。縦長の肉厚のある剥片で、断面がやや三角形を呈する。片側縁を縦に剥離して、先端部を鋭角に作り出している。表面に自然面を残す。石材は安山岩系である。

37は石核である。最大長7.1㎝、最大幅4.0㎝、厚さ2.6㎝で、重さ68.0ｇである。剥片裏面を細かく剥離して平たく加工し、表面中央に礫面を残しながら側縁を上部から剥離し、剥片を作り出している。横広の剥片が剥離されたようである。石材は安山岩系である。

38は打製石斧である。最大長（残存部）7.8㎝、最大幅5.0㎝、厚さ0.9㎝で、重さは56.0ｇである。器形は短冊形で、扁平な石材を利用し、側縁部に片方向からの敲打で整えている。横断面は薄いレンズ状をなす。頭部は欠損している。刃部はやや円刃で、横断面は片平刃である。刃部は一部使用により打ち欠く。石材は緑泥片岩である。

39は局部磨製石斧である。最大長10.5㎝、最大幅5.8㎝、厚さ1.5㎝で、重さは127.0ｇである。両側縁を敲打で器形を整え、僅かにくびれを作り出し、やや撥形を呈する。刃部は円刃で、研磨して成形している。横断面は両凸刃である。僅かに礫面を残す。石材は緑泥片岩である。

40は局部磨製石斧である。最大長15.9㎝、最大幅5.1㎝、厚さ1.4㎝で、重さは135.0ｇである。頭部が尖り、刃部も細い器形で、最大幅上位は片側縁のみ片側から、最大幅下位は両側縁を両面から敲打し器形を整えている。刃部は円刃で、研磨して成形している。横断面は両凸刃で、やや鈍角である。石材は砂岩である。

41は打製石斧である。最大長13.0㎝、最大幅5.3㎝、厚さ1.4㎝で、重さは127.0ｇである。器形は頭部が尖る撥形で、最大幅から下位の両側縁を敲打で整える。やや抉りを入れている。横断面が厚い

レンズ状をなす。刃部は円刃で、横断面は片凸刃である。礫面を多く残す。石材は緑泥片岩である。

42は打製石斧である。最大長11.2㎝、最大幅6.8㎝、厚さ1.1㎝で、重さは95.0ｇである。器形は分銅形で、両側縁を両面からの敲打で器形を整える。横断面は薄いレンズ状をなす。刃部は偏刃で、断面は片凸刃である。胴部中位が装着部になると思われ、丁寧に作り出されている。石材は片岩系である。

43は叩き石である。最大長6.7㎝、最大幅5.6㎝、厚さ5.0㎝で、重さは244.0ｇである。やや扁平な自然石で、短側縁に潰痕が僅かに残る。長側縁の片側がやや平坦になり、握りやすくなっている。石材は砂岩である。

44は石錘である。最大長6.5㎝、最大幅4.8㎝、厚さ1.1㎝で、重さは5.75ｇである。扁平な隅丸長方形の自然石を利用し、短側縁に抉りを入れるものである。石材は砂岩である。

第３表　遺物出土地点一覧表

番号	種別	器種	グリッド	出土地点	備考
1	黒色土器	椀	P	ＳＢ０９　Ｐ－１　No.２	
2	土師器	椀	－	ＳＤ０６埋土一括	
3	土師器	椀	M	ＳＤ０５埋土	
4	土師器	小皿	P	ＳＢ０９　Ｐ－１　No.１	
5	土師器	小皿	－	ＳＤ０３埋土一括	
6	土師器	小皿	J	ＳＦ０２埋土一括	
7	土師器	杯	L	ＳＦ０２硬化面直上　No.８	
8	土師器	杯	L	ＳＦ０２硬化面上　No.７	
9	土師器	鍋	M	ＳＢ０９　Ｐ－４　No.１	
10	須恵器	椀	－	ＳＦ０２埋土一括	
11	須恵器	鉢	－	ＳＦ０２埋土一括	
12	須恵器	鉢	K	ＳＦ０２埋土一括	
13	須恵器	甕	－	ＳＦ０２埋土一括	
14	須恵器	甕	－	ＳＦ０２埋土一括	
15	須恵器	甕	－	ＳＦ０２埋土一括	
16	瓦質土器	深鉢	M	ＳＦ０２硬化面直上　No.１７	
17	土製品	錘	－	ＳＤ０３上層	
18	土製品	錘	－	表土	
19	石製品	鍋	M	ＳＢ０９　Ｐ－４　No.３	
20	白磁	皿	－	ＳＦ０２硬化面直上	
21	白磁	皿	K	ＳＦ０２硬化面直上　No.１４	
22	白磁	椀	－	ＳＦ０２埋土一括	
23	白磁	椀	－	ＳＦ０２埋土一括	
24	青磁	椀	L	ＳＤ０３埋土一括	
25	青磁	椀	－	表土一括	
26	青磁	椀	－	ＳＦ０２埋土一括	
27	縄文土器	深鉢	N	包含層一括	
28	縄文土器	深鉢	P	包含層一括	
29	縄文土器	深鉢	N	包含層一括	
30	縄文土器	壺形土器	K	包含層一括　No.１	
31	縄文土器	深鉢	N	包含層一括　No.５	
32	石器	剥片	K	ＳＦ０２埋土一括	
33	石器	剥片	L	ＳＦ０２埋土一括	
34	石器	剥片	L	ＳＦ０２硬化面直上　No.９	
35	石器	剥片	M	ＳＦ０２埋土一括	
36	石器	剥片	J	ＳＤ０５埋土一括	
37	石器	石核	M	ＳＦ０２埋土一括	
38	石器	打製石斧	K	ＳＦ０２埋土一括	
39	石器	局部磨製石斧	J	ＳＦ０２埋土一括	
40	石器	局部磨製石斧	M	ＳＦ０２埋土一括	
41	石器	打製石斧	M	ＳＦ０２埋土一括	
42	石器	打製石斧	K	ＳＦ０２埋土一括	
43	石器	叩き石	－	ＳＦ０２埋土一括	
44	石器	石錘	K	ＳＦ０２埋土一括	

第３章　まとめ

第１節　検出遺構の時期と性格

１　掘立柱建物跡について

調査区北側で検出された掘立柱建物跡（SB09）の時期であるが、遺物包含層が削平を受けていたため層位からの検討はできない状況であった。しかし、Ｐ―１、Ｐ―４の柱穴の埋土中に遺物が包含されていたため、これら遺物から当該建物跡の時期の検討を試みたい。

Ｐ―１から遺物が２点（遺物番号１、４）出土している。１は黒色土器Ｂ類椀である。口縁部が外反することなく内湾気味に立ち上がり、12世紀代の土師器椀の器形と似ていることから12世紀代と思われる。４は土師器（小皿）で、糸切底を有し、見込み部に不整方向の軽いナデを施すことから、糸切底が肥後において出現して間もない12世紀後半段階と思われる。

Ｐ―４からも遺物が２点（遺物番号９、19）出土している。９は土師器（土鍋）で、同一個体の胴部を含めてまとまって検出され、２次焼成痕が見られる。時期は明確には分からないが、11世紀末頃から煮沸形態として甕から器高の低い鍋が出現することと関連があるものと思える。19は石鍋で、やや内湾気味に立ちあがり、鍔無しの形態である。これらの特徴から、11世紀代と思われる。

これらの遺物の時期の検討から、掘立柱建物跡（SB09）の時期は、下限の12世紀後半段階としたい。

また、建物の隅柱のみに遺物が検出されていることが特徴的であるが、調査段階では出土状況から祭祀に関連するものとは明確に言えない。今後、同様の事例を検討し、再検討を試みたい。

２　道路跡について

調査区中央付近から北東に延びる掘切状の道路跡（SF02）の時期も掘立柱建物跡と同様、層位による検討はできない。遺構埋土から遺物が多数検出されているが、旧石器～中世の遺物が細片で埋土中に散在した状況であった。また、埋土自体分層できないほど一括して埋め戻している。これらのことから、埋土中の遺物は周囲の遺物包含層を掘削し採土した土に含まれていたものと言える。よって、出土遺物からも時期の検討はできない。

現在の道路の脇に旧道が通っているが、その旧道と重なることが確認されている。旧道を１㎞北へ行った下津原地区に町指定の六地蔵が旧道沿いにある。このことから、六地蔵造立時期には道路が通っていたといえる。ただし、上限は先の理由により明確には言えないが、ＳＢ09より後行することは調査で確認されているため中世のある段階としたい。

３　その他の遺構について

その他の遺構としては、溝跡、土坑がある。

溝跡（SD03、05、06、07）は、埋土中に遺物は確認されたが、掘立柱建物跡（SB09）に近接し、時期的に同時期の遺物であるため時期をあまり置かず流れ込んだものと思われる。SD03、05は道路跡（SF02）と添い、それから直角に折れ、SD06になることから、SF02の時期の地割に添っており、同時期の溝跡である。地形的に低いほうへ段をつけており、灌漑用水路であったものと思われる。SD07もSD06と平行していることから、ほぼ同時期の溝跡であろう。

また、焼土坑（SK04）は、遺物が出土していないため明確には言えないが、現在の地割の境界付近にあるため、近世以降と思われる。また、溝状遺構のうちSD01は、遺物が出土していないため明確には言えないが、現在の地割と平行するため、近世以降のものと思われる。

第２節　各時代の考察

１　縄文時代

調査区北側に遺物包含層が一部残存していたため、そこから後期後半～晩期までの土器片が検出された。ただ、遺物がいずれも細片で、密集した状況ではなかったため、包含層自体、２次堆積土と思われる。

また、SF02の埋土中から黒曜石製の縦長剥片、安山岩系の横長剥片、石核、緑泥片岩、砂岩製の打製石斧等の石器が検出されている。

これらの遺物の存在から近隣に集落があった可能性は極めて高い。石器製作場、住居などの遺構の検出が今後の課題といえよう。現時点では、平成６年度の調査時にＡ区から５基の土坑が検出されていることから調査区南西側にその存在が想定される。

２　古代末～近世

古代末から中世初頭にかけての掘立柱建物跡が検出されていることから、当該時期に小規模な集落があったものと思われる。また、SF02から細片ではあるが同時期の白磁・青磁といった輸入陶磁器が混入していたことから近隣に地方の有力者の居館があった可能性がある。

この掘立柱建物が廃絶された後、菊池川右岸、赤穂原台地の縁辺を通る道路（SF02）が設置される。この道路を北上すると下津原地区に通じる。下津原地区には金光寺、堂の上寺跡といった中世寺院跡や道路際に町指定史跡「下津原西六地蔵」があることから、中世段階から開けた土地であったことがわかる。

近世以降も、下津原地区には下津原港が設置され、また、竈門地区においても寛永年間に調査区を南に100ｍいったところに西本願寺派の光教寺が創建されている。この光教寺が字名の「寺原」の由縁である。

以上、各時代の様相を復元してみたが、今後更に検討を加え機会をみて考察を行いたい。

写 真 図 版

図版 1

調査区北側全景（北から）

図版 2

SB09完掘状況（北から）

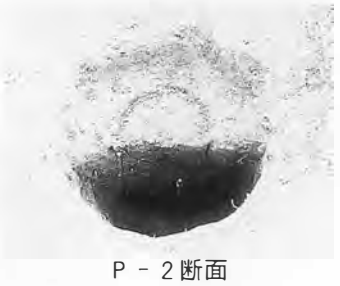
図版 3

1

P－1

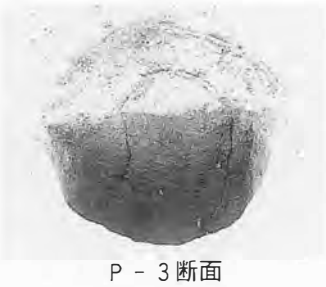
2

P－2

3

P－2断面

4

P－3

5

P－3断面

6

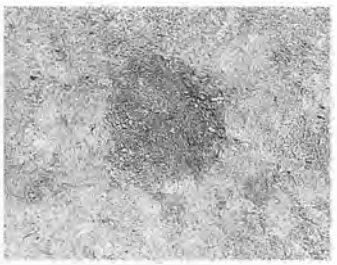
P－4

7

P－4断面

8

P－5

9

P－6

10

P－7

11

P－8

12

P－9

SB09ピット検出状況

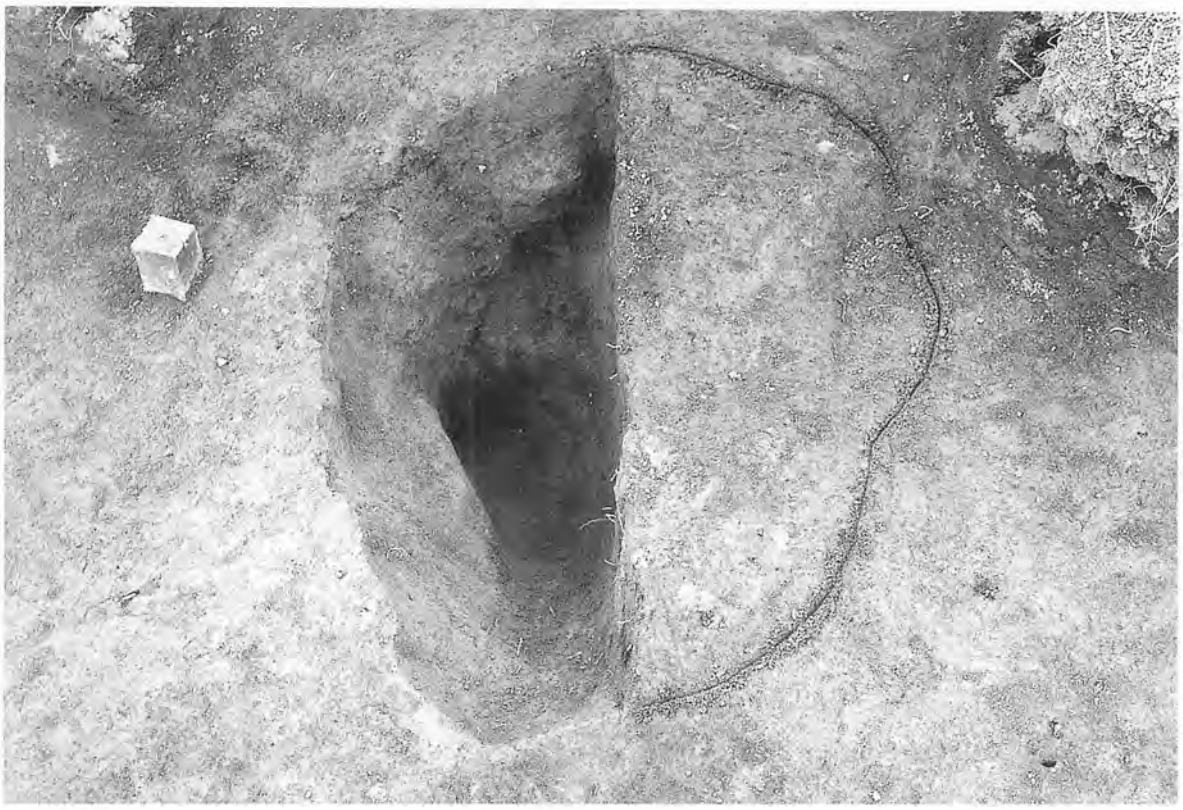
図版 4

SF02完掘状況（北東から）

図版 5

SF02完掘状況（南西から）

図版 6



SK04半截状況（東から）

図版 7

SK04土層断面（南から）

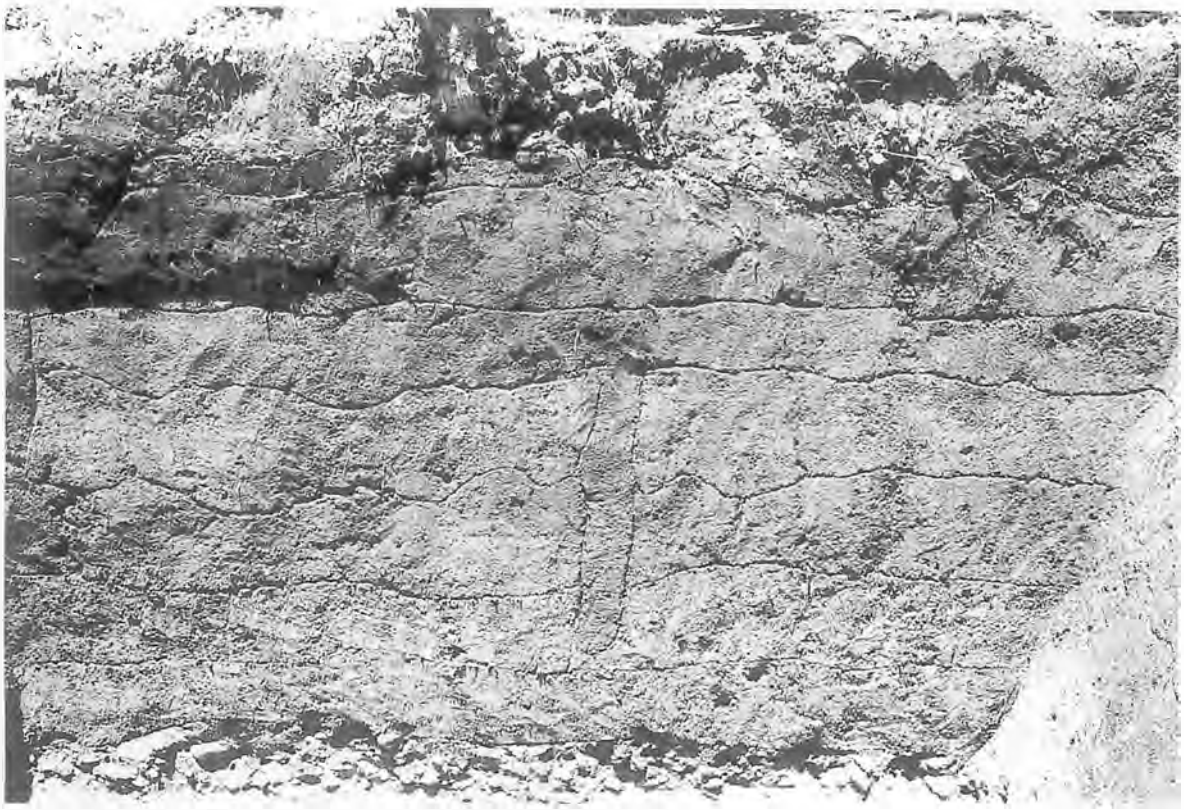
図版 8

SD01完掘状況（東から）

図版 9

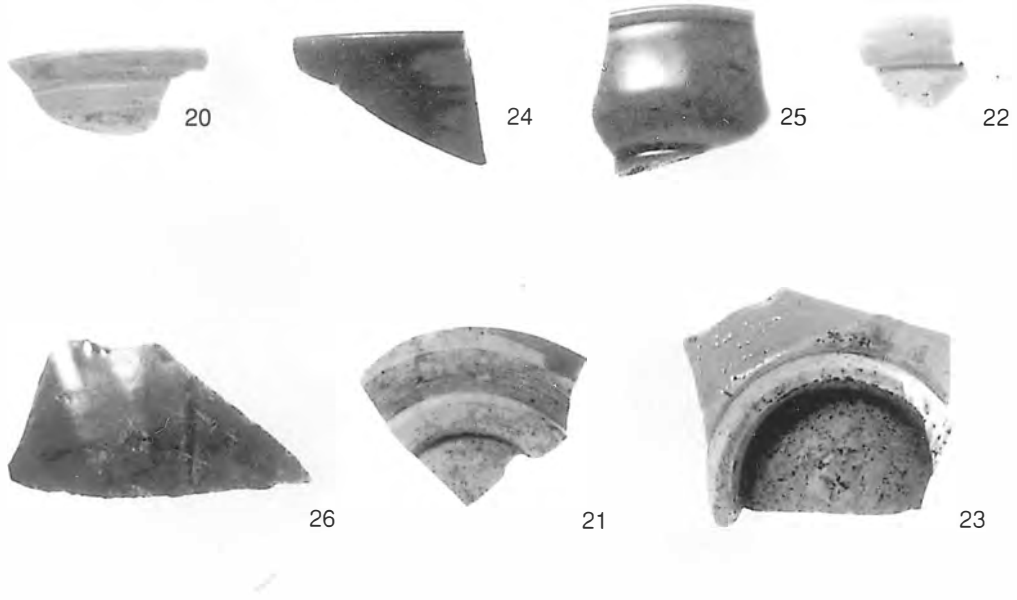
SD06・07完掘状況（東から）

図版10



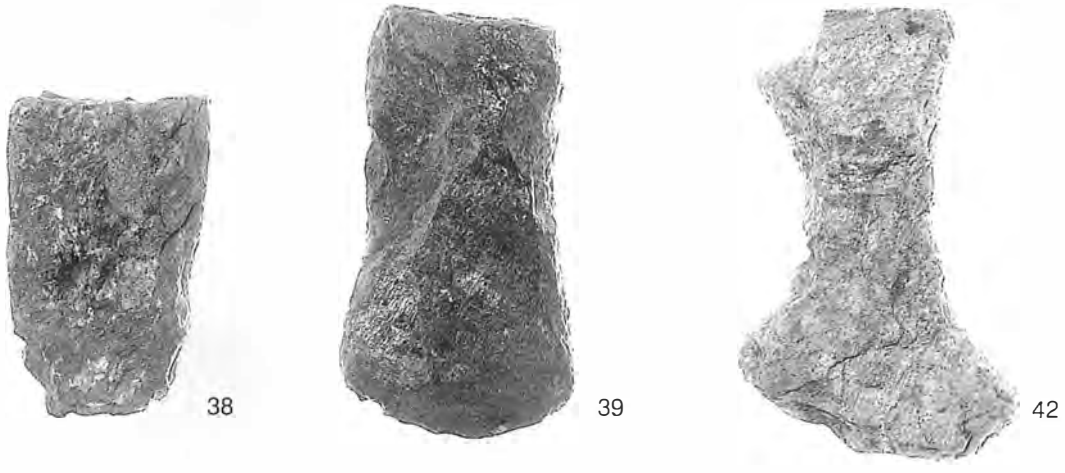
調査区土層断面（東から）

図版11



白磁・青磁

図版12



石　斧 (1)

図版13

40

41

石　斧 (2)

図版14

32

33

34

35

36

37

その他の石器

報告書抄録

ふりがな	かまどてらばるいせき
書名	竈門寺原遺跡
副書名	玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１９０集
編著者名	矢野裕介
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	熊本市水前寺６丁目１８―１
発行年月日	２０００（平成１２）年3月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かまどてらばる 竈門寺原 いせき 遺跡	くまもとけんたまなぐんきくすいまち 熊本県玉名郡菊水町 おおあざかまどあざてらばる 大字竈門字寺原	43365	02	33° 0′ 30″	130° 36′ 45″	(自) 19980511 (至) 19980619	700	玉名立花線緊急地方道整備事業に伴う本調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竈門寺原遺跡	包含層 集落	縄文時代 中世	掘立柱建物　1基 土坑　1基 道路跡　1条 溝跡　5条	縄文土器、打製石斧、剥片、石核等 黒色土器、土師器、須恵器、瓦質土器、白磁、青磁、土錘、石鍋	12世紀代の小規模な集落の存在が予想される。

熊本県文化財調査報告第190集

竈門寺原遺跡

発行年月日　平成１２年３月３１日

発　　行　熊本県教育委員会
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1

印　　刷　株式会社　秀　巧　社
〒861-2234 上益城郡益城町古閑106

11 教 教文
② 007

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 190 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：竈門寺原遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/